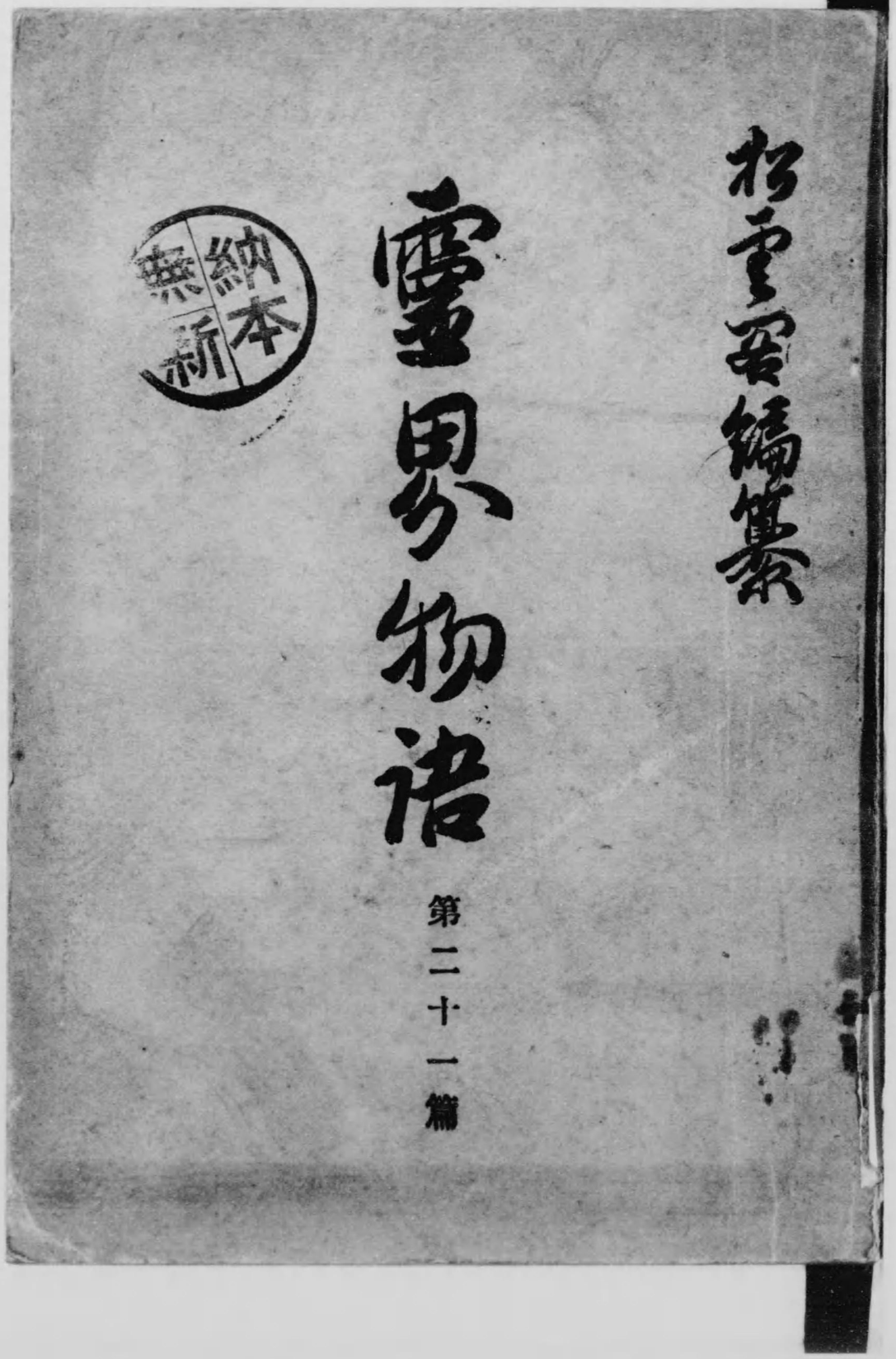
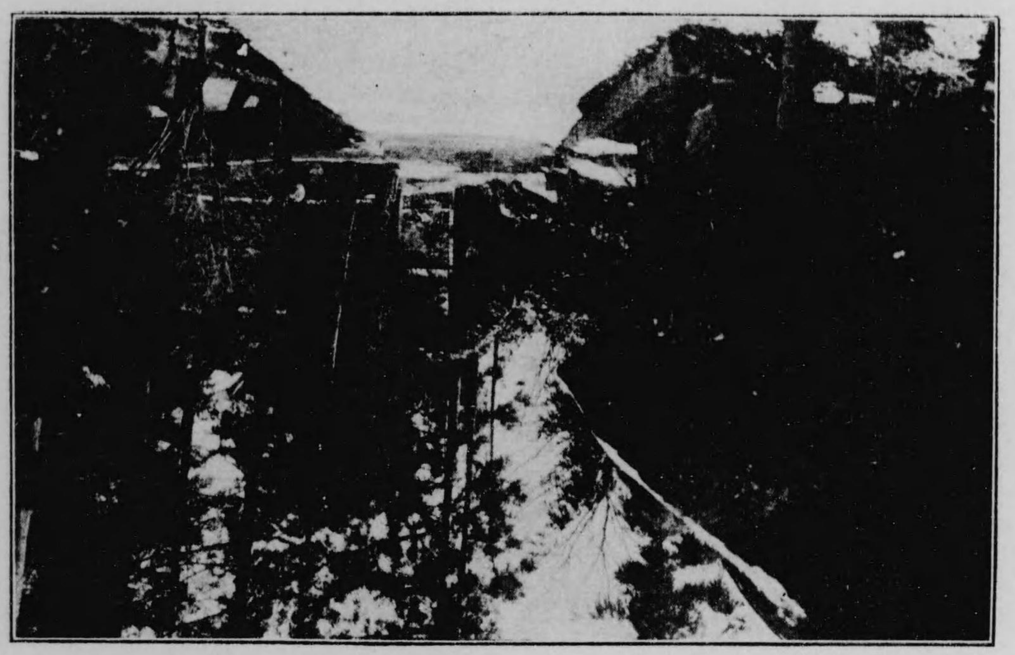


始

特205
520

靈異物語



蒙の内弟神本人

序

時代に順應せよとは、今日の上流に立てる某治者の訓戒であつた。併し乍ら日進月歩の今日、順應も結構だが、併し無暗に外國の行方許りに順應してはならない。我國は萬世一系の君主國である以上は、世界の趨勢に省み、建國の精神に背馳せない樣に、取捨選擇するの必要がありませう。世界の大勢に順應しつゝ、國民を指導するのが、治者や學者の最も注意すべき義務であると思ふ。瑞月が神命に依りて此物語を口述するのも、又今日一般の人々、卽ち老若男女貴賤智愚の區別なく諒解出來得るやうにと、卑近な言葉を使つて、多數者の智識の程度に順應しつゝ、神意の一部を發表指導する考へでありま

す。故に所謂智者學者の眼より見れば　實に約らない物語たることは、口述者に於ては百も千も承知の上のことであります。　要するに此物語は、神、幽、現三界の狀況や、神の大御心の一端や、神理の片鱗を描き出したに過ぎませぬ。讀者幸ひに諒せられん事を希望致します。

大正十一年五月二十一日舊四月廿五日

口述者　瑞月識

靈界物語【第二十一篇】目次

	頁
序文	
凡例	
總說	
第一二二章　千辛萬苦	
六七五　高春山	五
六七六　夢の懸橋	四七
六七七　月休殿	八一
六七八　砂利喰	一〇七

六七九　言の疵……一二七

第一一三章　是生滅法

六八〇　小杉の森……一五七
六八一　誠の寶……一八五
六八二　津田の湖……二〇九
六八三　改悟の酬……二二六

第一一四章　男女共權

六八四　女權擴張……二三七
六八五　鬼娘……二五九
六八六　奇の女……二八二

六八七　夢の女……三〇二
六八八　恩愛の涙……三一五

第一一五章　反復無常

六八九　化地藏……三三五
六九〇　約束履行……三六一
六九一　酒の息……三八〇
六九二　解決……三九三

靈界物語第廿一篇目次　終

凡例

一、本篇の原稿は全部口述者の周到なる校閲を經たものであります。お蔭で校正上のいろ〳〵な注意に就て得る所がありました。

一、既刊第二十二篇及び其他の篇の「百足姫」は、「蜈蚣姫」となるべきでしたのを、活字が無かつたので已むを得ず「百足姫」としておきましたが、本篇より全部「蜈蚣姫」と訂正しておきました。

一、「物語」の中に屢「言靈戰を發射する」といふ言葉が現はれて來ますが、それは「言靈線を發射する」の誤りです。が、「言靈戰に參加する」といふ如き場合は無

論「言靈戰」でよい譯です。

一、「……でありません。」とか「……であるんだ。」とかいふ場合の「ん。」は本篇より全部「……でありませぬ。」又は「……であるのだ。」に訂正しましたが、讀む時には矢張「……でありません。」「……であるんだ。」といふ風に讀むのださうです。

大正十二年三月

編著識

靈界物語【第二十一篇】

口述者　出口瑞月
筆錄者　松村眞澄
　　外山豐二
　　加藤明子

總說

靈界は想念の世界であつて、無限に廣大なる精靈世界である。現實世界は凡て神靈世界の移寫であり、又縮圖である。靈界の眞象をうつしたのが、現界卽ち自然界

である。故に現界を稱してウツシ世と言ふのである。例之一万三千尺の大富士山を僅か二寸四方位の寫眞にうつした樣なもので、その寫眞が所謂現界卽ちウツシ世である。寫眞の不二山は極めて小さいものだが、其實物は世人の知る如く、駿、甲、武三國にまたがつた大高山である如く、神靈界は到底現界人の夢想だに爲し得ざる廣大なものである。僅か一間四方位の神社の內陣でも、靈界にては殆ど現界人の眼で見る十里四方位はあるのである。凡て現實界の事物は、何れも神靈界の移寫であるからである。僅に一尺足らずの小さい祭壇にも、八百萬の神々や又は祖先の神靈が、餘り狹隘を感じ玉はずして鎭まり玉ふのは、凡て神靈は情動想念の世界なるが故に、自由自在に想念の延長を爲し得るが故である。三尺四方位の祠を建てゝおいて、下津岩根に大宮柱太敷立、高天原に千木高知りて云々と祝詞を奏上するのも、少し許りの供物を献じて、横山の如く八足の机代に置足らはして奉る云々とある祝辭の意義も、決して虛僞ではない。凡て現界はカタ卽ち形の世界であるから、その祠も供物も前に述べた不二山の寫眞に比すべきものであつて、神靈界にあつては極めて立派な祠が建てられ、又八百萬の神々が知食しても不足を告げない程の供物となつて居るのである。凡て世界は靈界が主で、現界卽ち形体界が從である。一切萬事が靈主体從的に組織されてあるのが、宇宙の眞相で大神の御經綸である。現實界より外に神靈界の嚴然として存在する事を知らない人が斯んな說を聞いたならば定めて一笑に附して顧みないでありませう。無限絕對無始無終の靈界の事象は、極

限された現界に住む人間の智力では、到底會得する事は出來ないでせう。

この物語は、現、幽、神、三界を一貫し、過去と現在未來を透徹したるが故に、讀む人々に由つて種々と批評が出るでせうが、須らく現實界を從とし、神靈界を主として御熟讀あらば、幾分か其眞相を握むことが出來るであらうと思ひます。

惟神靈幸倍坐世。

大正十一年五月廿一日　於松雲閣　口述者識

第一一二章　千辛萬苦

六七五　高春山

雲を壓して聳り立つ
バラモン教を開きたる
八岐大蛇の分靈
山野河海を睥睨し
六甲山と相俟て
蜈蚣の姫の手下なる
心を碎く鳩胸や

高春山の山頂に
大國別に憑依せる
醜の曲靈が割據して
大江の山と三國岳
冷たき魔風を吹き送り
鷹依姫か朝夕に
仕組の奥は割れ岩の

膽を煎るこそ恐ろしき

南に瀬戸の海を控へ、東南に浪速の里を見降し、西北東に重疊たる連山を瞰下す、高春山の絶頂に岩窟を作り、バラモン教の一派を建て、アルプス教と稱し、自轉倒島を飽く迄も八岐大蛇の勢力圏内に握らんと、晝夜心を惱まして居た。山麓には細長き津田の湖が横たはつてゐる。此湖水には大蛇の分身たる數多の蛇神潜伏して、日夜邪氣を吐き出し、地上の空氣を腐爛せしめつゝあつた。高姫、黒姫は波斯の國北山村の本山を捨て、蠑螈別、魔我彦をして後を守らしめおき、三五教に歸順したる改心の證據として、アルプス教の鷹依姫を言向け和さんと、波斯の國より乘り來れる飛行船に乘じ、高春山の山麓に着いた。此れより二人は巡禮姿に身を變じ、高春山の鷹依姫が岩窟に進まんと、

壁を立てたる如き高山を登り行く。

高春山の五合目許りの處に、天の森と云ふ巨岩が立並び、中央の樹木鬱蒼たる間に、小さき祠が有る。之を龍神の宮と云ふ。此龍神は雨風を自由になす神と稱へられ、鷹依姫が唯一の守護神として尊敬して居た。それが爲に何人も此境域に近付く事を嚴禁して居た。テーリスタン、カーリンスと云ふ二人の荒男は、此龍神の宮を固く警護して居た。二人は巖の上に高鼾をかいて寢んで居る。高姫、黒姫は漸く此處に登り來り

高「なんと立派な岩が並んで居るぢや有りませぬか。一つ此景色の好い所で休息して行きませう。まだ頂上までは餘程道程が有りますから……」

黒「宜しう御座いませう」

と碁盤なりの門の戸を押し開け奥に進み入る。

高「ア、此處には妙な祠がある。是れが噂に名高い鷹依姫の、雨を降らせ、風を起す唯一の武器でせう。一つ改心さしてやりませうか。將を射んとする者は先づ其馬を射よと云ふ事だから、此雨風を起す惡神の眷屬を改心させる方が、近路かも知れませぬなア」

黒「マア一寸お待ちなさいませ。拙劣に間誤付くと、大風大雨で攻められては困りますから、充分に樣子を探つた上、ゆつくりとやらうぢやありませぬか」

高「そりや黒姫さん、何を仰有る。冠島の金剛不壞の玉を腹に呑み込んだ此高姫、言はば妾の體は如意寶珠も同然、多寡の知れた雨や風を起す龍神位に、何躊躇する事が有りますかい。お前さんは三五教へ歸順してから、チッと變になつたぢや有りませぬか……イヤ三五教に歸順する以前から、高山彦さんに對し、餘程御親切が過ぎたやうですよ。神第一の主義をぐつかへ遺失し、高山第一、神第二と云ふ樣なあなたの態度だから、そんな弱音を吐く樣になるのだ。モウ此處へ來たら生命を的に、惡神を改心させて、大神樣にお目にかけ、我々の今迄の御無禮、お氣障りの謝罪をせなくてはならぬ。謂はば千騎一騎の性念場だ。チッとしつかりしなさらぬかい」

黒「ハイ〳〵、そんな事に呆けて居る樣な黒姫と見ますかな。チト殘酷ぢや有りませぬか。それ程妾に信用がないのなれば、却て貴女の御邪魔になつては可けませぬから あなたユッタリ如意寶珠の力を發揮して手柄をなさいませ。妾は飛行船を借用して、

自分の性の合うた所へ活動に參ります」

高「益々變な事を仰有るぢやないか。すべて戰ひは結束を固くせねば勝利は得らるゝものでない。味方の方から裏切りをする樣な弱音を吹いて何うなりますか。飛行船は既に〳〵鷹依姫の部下が占領して了つて居ますよ。飛行船なんかモウ必要はない。是れから頂上の割れ岩の醜の岩窟を言向け和し、進んで六甲山へ行かねばならぬ。チト確りしなさい。あまり高山さんに精神を取られて居れるものだから、曲津が憑依したのだらう。サア妾が鎭魂をして査べてあげやう。婆アの癖に髮を染たり、薄化粧をしたり、まるで化物見たやうな、そんな柔弱な事でどうして紳界の御用が出來ますか。お前さんは二つ目に、言依別命樣を柔弱だとか、ハイカラだとか非難をしなさるがそれはお前さんの心が映つて見えるのだよ」

黑「何と仰有つても、鎭魂は御無用です。そうしてお暇を頂きませう」

高「御勝手になさいませ。モウ今日限り師弟の緣を絕りますから」

黑「其お言葉を待つて居ました。サア〳〵どうぞ切つて貰ひませう」

高「ア、切つてあげよう。黑姫の肉體を此處に置いて、サッサと歸りなさい。黑姫はソンナ馬鹿な事を云ふ身魂ぢやない」

黑「決して〳〵守護神（精靈）が言ふのぢや有りませぬ。黑姫の本人が申すのです。何程神直日大直日に見直し聞直して、妾の肉體に瑕瑾をつけぬ樣に宜り直して下さつても、それは氣休めです。どうしてもお暇を頂戴致します。本當に好かんたらしい。驕

慢な高姫さん。どうぞ此れ限り、何と云つても御暇を頂き、醜の岩窟の鷹依姫様の御家來となつて活動致します。ウラナイ教の時には妾を大變に重く用ひて下さつたが、三五教になつてからは、あなたを始め、誰も彼も妾を馬鹿にして……態兒たか、偉相に威張つて居つたが、今の態は何ぢや。白米に籾が混つた樣な顏して、隅くたに小ぢくなつて居らねばならぬぞよ……と神樣が仰有つたぢやないか、其實地が來たのだなんて……言依別命の左右に侍る幹部連が、妙な顏をして妾を冷笑して居る。それが第一氣に喰はないのだ。モウ妾は三五教は駄目だと思ふ。しかし神樣は結構だ。取次が間違つて居るのだから、三五教に離れても、あなたに暇を貰つても、一寸も痛痒は感じない。神樣だけは妾の眞心を知つて居て下さる。お前さんも將來になつたら……

……ア黒姫はそんな心で有つたか、流石黒人だけあつて偉い者だつたと、アフンとしなさる事が出來て來ませうぞい」

高「隨分猛烈な氣焰ですなア。どうなつと勝手になされ。人を杖に突くなと云ふ事がある。妾もこれから獨舞臺で活動するのだ」

黒「師匠を依賴にするなと神樣が仰有つた。こんな猫の目の樣に心のクレ〳〵變る高姫のお師匠さんは、眞平御免だ。好い腐れ縁の切り時だ。お前さんは今日限り妾の宗旨敵だから、そう思ひなさい。天晴戰場で、堂々とお目にかゝりませうかい」

岩の上に寢て居つた、最前の二人の男、ムックリ立ちあがり

男「コリヤ女、此處を何と心得て居る。天の森の龍神樣の御守護遊ばす聖地だ。汚ら

はしい女の分際として、斷りもなく、此聖地を蹂躙しやがつた。サアもう量見がならぬ。當山の規則に照らし制敗してやらう。……オイ、カーリンス、綱を持つて來い。フン縛つて鷹依姫樣の御前に引ずり据ゑてやるのだから……」

黑「モシ〳〵お二人のお方、此處へ參りましたのは、決して蹂躙したのではありませぬ龍宮の乙姫樣の肉の宮、黑姫に用があるから、一寸來て呉れいと、天の森の龍神樣が仰有つたので、飛行船に乘つて遙々參つたのですよ」

男「ナニ、お前さんが、龍宮の乙姫さんの御命令で來たと云ふのか」

黑「ハイ〳〵、妾は乙姫樣の肉の宮ですもの」

男「妙な事を言ひますな。我々の御大將鷹依姫さんも、此頃は大變に、龍宮の乙姫さんがお出でになると云つて、一生懸命祈念を凝らして居られますよ」

黑「それ見なさい、高姫さん」

高「龍宮の乙姫さんは、遠の昔にお前さんの肉體を出て、後には曲津神が巣を組んで居るのですよ」

男「最前から我々が寢眞似をして、二人の話を聞いて居れば、三五教の宣傳使と見ゐるが、なんだか愚圖々々と喧嘩をしてゐたぢやないか」

黑「沒分曉漢の高姫が、如意寶珠の玉を腹に呑み込んで居ると言つて、あんまり威張るものですから、今妾の方から絶縁を申込んだ所です」

男「そりや結構だ。お前さんは全く我々の同志だ。よし〳〵鷹依姫樣に申上げて、都合

好く執成しを致しませう」

黒「どうぞ宜しうお頼み申します。……コラ高姫、態を見い、何程如意寶珠でも、大勢と一人では叶ふまいぞや」

と捨臺詞を殘し、テーリスタンと云ふ大の男に手を曳かれ乍ら急坂を登り行く。

高「ア、仕方がない。到頭惡魔の容物になつて了つた。黒姫も今迄長らくの苦勞を、一朝にして水の泡にして了つた。ア、可哀相なものだなア。コレ〳〵そこのカーリンスと云ふお方、お前さんは何處から來たのだ。生れは何處だね」

カ「自分の國や生れが分る樣な者が、斯んな所へ來て、宮番をするものかい。馬鹿な事を言ふない」

高「お前さんは如意寶珠の玉の肉體を知つて居るか。日の出神の生宮は誰だと云ふ事が分つて居るかい」

カ「知つて居らいでか。お前の事ぢやないか。眞僞の程は確でないが、最前から二人の話を聞いて居た。お前が所謂日の出神の生宮だらう」

高「敵の中にも味方あり、味方の中にも敵があるとは、能う言つたものだ。お前は妾の知己だ。中々身魂が能く研けて居る。三五教へでも入信つたら、こんな小つぽけな宮番をせなくとも、立派な宣傳使になれるがなア」

カ「私は宣傳使は嫌ひだ。朝から晩まで酒を飲んで、グウ〳〵こ寢るのが好だ。彼方や此方へ、乞食の樣な眞似をして、戸別訪問をして、犬の樣に杓で水をかけられたり、

箒で掃出されたり、引合はぬからなア。爺の痰を飲まされ、薯汁と痰の混汁に辷り轉けて、揚句の果てには、赤裸で茨の池に落ち込み、着物を敵から貰う樣な事が出來るから止めとかうかい」

高「お前は妙な事を言ふ。薯汁や痰に辷り轉けたのは何時の事だ。そして又誰の事だいなア」

カ「そりやお前さんよく御存じの筈だ」

高「ハテなア。海洋萬里の波斯の國の出來事の譏り走りを聞いて居るとは、世間は廣いやうなものゝ狹いものだ。これだから人間は愼まねばならぬ。惡事千里と云つて、何處までもよく行きわたるものだなア」

カ「お前さんビックリしただらう」

高「そりや又、誰に聞いたのだい」

カ「今頃にそんな事を知らぬ者が一人でも有るものか。隨分名高い話だぜ。鷹依姫さんは、をつゝけ、心の明き盲、高姫と云ふ者が此山に出て來るから、一つ泡を吹かして改心させてやらねばならぬ。彼奴を改心させたならば、アルプス敎の爲には大變に間に合ふ……と云つて居られました。お前さんは高姫さんだらうがな」

高「ヘン、見違ひをして下さるな。黑姫の樣な猫の目とは、チッと違ひますよ。サアこれから高姫が獅子奮迅の勢を以て、鷹依姫其他の部下を悉く言向け和すのだ。萬々一、高姫の失敗になる樣な事であれば、再び三五敎へは歸らぬ積りだ。喉でも突い

て死んで了うのだから、何と云つても、バラモン教の燒直しのアルプス教に對し、徹頭徹尾、頭を下げぬから、其積りで居なさい」

カ「大變な固い決心だなア」

高「定まつた事だよ」

高姫は谷間から滲み出る清水を手に掬んで、渴いた喉を潤して居る。其隙を窺ひ、カーリンスは高姫の首に細紐を手早くひつ掛け、グッと首を締め

カ「サアもう大丈夫だ。これで一つ、私の出世が出來る」

と頭を下に足を上にして背に負ひ乍ら、急坂をエチ〳〵登りて行く。

岩窟の中には、アルプス教の開山鷹依姫と云ふ中婆、木の株で作つた天然の火鉢を前に、長煙管を喫は、二三の部下を前に据ゑ

鷹「今日は高姫、黑姫と云ふ二人の婆アが、此處へ出て來る筈だ。キッと神の魔力に依りて、天の森の龍神の宮に立ち寄る筈だから、テーリスタン、カーリンスの二人に、待伏せをさせて置いたのだが、やがてやつて來る時刻だらう」

甲「そんな事は、何うして分るのですか」

鷹「そんな事に抜目の有る妾かいな。チャンと三五教の聖地へ指して密偵が這入り込ましてあるから、それが知らして來たのだよ。モウつい二人共、此處へやつて來る筈だから、お前達も充分に氣を附けて、妾が此煙管で「クワン」と此警盤を叩いたが最後飛んで出るのだ。それまでは次の間で、横になり考へて居るのだよ。併し寢て了つて

は叮かぬから、目を開けて居るのだぜ」

三人は「ハイ」と答へて、次の間に身を隠した。そこへテーリスタンに伴なはれて黒姫が這入つて來た。

テ「只今歸りました。あなたの眼識には、實に敬服致しました。此通り黒姫を巧く引張り込みましたから、御安心下さいませ」

鷹「これ〳〵テーリスタン、何と云ふ失禮な事を言うのだい。鬼の岩窟か何ぞの樣に、引つぱり込みましたなんて、チツト言靈を慎みなさい。結構なお方を御迎へして歸りましたと、何故言はないのだい、……これは〳〵黒姫樣、遙々とよう來て下さいました。空中は餘程風が烈しうてお困りでしたらう。後程ユル〳〵とお話を承はりますから少時奥で御休息を願ひます」

黒「初めてお目にかゝります。御神德の高い御山と見ゐまして、雲までが皆謙遜り、谷底へ遠慮を致してゐますなア」

鷹「雲に突き出た高春山、誠の御神德は俗塵を離れて中空に聳ゐた、聖地でなければ本當の神力は現はれませぬ。炮烙を伏せた樣な低い山を背景にして神業を開始するなぞと、てんで物に成りませぬワ。四尾山と高春山とは氣分が違ひませうがなア」

黒「大きに違ひます。妾も此處へ登つてから何だか氣分が面白くなつて來ました。三五教のヤの字を聞いても厭になりましたよ。それに言依別命と云ふハイカラが教主になつて居るのだから、内幕の腐爛狀態と云つたら御話になりませぬ。又高姫と云ふ…

……もとは妾のお師匠で御座いますが、カンカラカンのカン太郎が、頑固一圖を立て通すものですから、妾も此處までやつて來て、天の森の龍神さんの前で、暇を呉れてやりました」

鷹「それは何より結構です。此世でさへも切り替があるのだから、良い加減に思ひ切つて、新しい世界へ出た方が貴女の身の爲です」

黒「ハイ有難う御座います。妾の思うて居る事をスツカリ仰有つて下さいまして、唯一の共鳴者を得た樣な心持が致します。生れてからこれ位愉快な事は有りませぬワ」

鷹「サアどうぞ奥へ往つて御休息下さいませ」

ヒテーリスタンに目配せした。

テ「サア黒姫さん、奥へ御案内致しませう」

ヒ手を執つて石室の中に案内した。そして外よりガタリと鰐錠をおろし

テ「モウ斯うなつては、何程騒いても駄目ですから、充分に御考へ置きを願ひます。左樣ならば」

ヒ云ひ棄て、鷹依姫の側に立歸り

テ「首尾よう岩室の中に籠城を命じて置きました。併し乍ら、あの黒姫に限つて、決して御心配は要りませぬ。平岩の上に於てスツカリ、高姫と黒姫の心中を探りました。モウ大丈夫ですよ」

鷹「さう輕々しく樂觀は出來ない。油斷は大敵だ。罷り違へば爆烈彈を抱いて寢るよう

なものだからなア」

テ「龍神の祠の前へ來るまでは、兩人はどうしても、貴女を三五教へ歸順させると云ふ目算らしう御座いましたが、龍神の祠の中から神樣の御神靈が現はれ、黑姫にのり憑られたと見て、俄に……妾は龍宮の乙姫の生宮だと威張り出し、二人が喧嘩をおつ始め、到頭黑姫は貴女の部下になると云つて、こゝを目覓けて走り出しました。それで私もコレコソ渡りに船だと心勇み、手を曳いて此處まで連れて歸つたのです。モウ大丈夫ですから御安心下さいませ」

鷹「それは結構だが、モウ一人の高姫はどうなつたのだ？」

テ「高姫ですか。あれは何事にも抜目のないカーリンスに一任して來ました。キットふん縛つて、やがて登つて來るでせう」

鷹「あの高姫は腹に如意寶珠の玉を呑んで居るのだから、どうしても腹斷ち割つて、抉り出さねばならないのだ。併しうまくカーリンスが連れて歸つて來るだらうかなア。黑姫は玉無しだから、どうでも良い樣なものゝ、肝腎要なは高姫だ。カーリンスが大變に困つて居るだらう。お前御苦勞だが、モウ一度加勢に往つて呉れまいか」

テ「往けと仰有れば、往かぬ事はありませぬが、大變に、彼奴の顏を見ると、目がマクく〳〵するのですよ」

鷹「何、目がマク〳〵するか。正しく如意寶珠の玉を呑んで居る證據だ。目を塞いで、早く、どうでもいいからフン縛つてなつと、二人して連れてお出で」

テ

「承知致しました」

とテーリスタンは、山を一散走りに駈下る。後に鷹依姫は獨言

鷹「ア、時節は待たねばならぬものだなア。鬼雲彦や鬼熊別の大將株は、三五教の言靈とやらに討たれて、見つともない、男の癖に雲を霞と本國へ逃歸り、い、恥曝しをなされたが、女の一心岩でも徹すと云つて、夫に似ぬ健氣な女房蜈蚣姫さまは、三國ケ岳に立籠り、到頭黄金の玉を手に入れなさつた。ヤレ嬉しやと思ふ間もなく、又して も其玉を三五教にウマ〳〵と取返され、喜んだは束の間、サッパリ糠喜びとなつて了つた。併し何程蜈蚣姫さんが智慧があつても、神德が備はつて居ると云つても、此鷹依姫には足元へも寄れない。チッと爪の垢でも煎じて呑まして上げたいものだ、如意寶珠の玉の容器は、聲なくして呼びつける。黒姫は玉無しだが、彼奴は黄金の玉の在處を一番能く知つて居ると云ふ事だ。此間歸つて來た虎公の報告では、黒姫さへ手に入れてうまく白狀させたならば、黄金の玉も手に入ると云ふ事だから、云はば玉を手に入れたも同然だ。ア、なんとした結構な事が出て來たものだらう」

とカン〳〵と警盤を長煙管で打つた。ウッ〳〵と眠つて居た三人の耳には、早鐘の樣に强く響いた。三人はビックリ仰天起あがり、周章狼狽き、鷹依姫の居間に走り行き

「火事だ〳〵」

と摺鉢を抱へて走る奴、火鉢を抱へて飛び出さうとする者、座敷の眞ん中でキリ〳〵舞をする奴、右往左往に狼狽へ廻る。鷹依姫は長煙管の先で、三人の頭をビシヤ〳〵と叩

き、元の座に悠然として腰をおろし

鷹「コラ！〳〵貴様達は、何を狼狽へて居るのだ」

と大きな尖つた聲で喚き立てた。

甲「ハイ！〳〵何で御座いますか」

鷹「何でもない。氣を落ち着けなさい。今タカが一匹此家へ來るのだから、料理をせにやならぬ。其用意に出刃でも磨いで置きなさい」

乙「誰が鷹の樣なものを捕つたのですか。彼奴は肉食鳥だから味が惡うて、臭くつて喰べられませぬ。大きな圖体の割りとは羽ばつかりで、食う所はチヨピンとよりないものですよ」

鷹「エーそんな講釋は後にしなさい。羽の無いタカが來たのだ」

斯く話す折しも、カーリンス、テーリスタンの兩人は、高姫の首を締めた儘、擔いで這入つて來た。

鷹「ア、御苦勞々々、マア庭の隅へでも片付けておいて、ユックリ休んでお呉れ。隨分骨が折れただらうなア」

テ「イエ骨は折りませぬが、首だけ締めて置きました」

鷹「早く解いてやらないと息が絶れるぢやないか。息が絶れて了へば、折角の玉が死んで了ふ。生た内に取らねば間に合はぬのだ。早う〳〵……」

と急き立てる。カーリンス、テーリスタンの兩人は「ハイ」と答へて、德利結びにした

首の紐を解いた。最早高姫は絆切れたか、ビクとも動かぬ。

テ「ヤア此奴ア、到頭寂滅しやがつたなア。どうしたら宜からうか」

カ「人工呼吸法だ」

と兩人は一生懸命に高姫の體を捉へ、手や足を無暗矢鱈に動かして居る。暫くあつて高姫は「ウーン」と息を吹き返した。

テ「ア、もう此方のものだ。鷹依姫さん、此先はどうするのですか」

鷹「マア茶でも飲んでユックリするのだ。其内に妾から命令を下すから……」

暫くあつて

鷹「黒姫さんを招んで來なさい」

テ「ハイ」

と答へてテーリスタンは、黒姫を押込めた岩窟の前に走り行く。黒姫は忍び〳〵に何か謠つて居る。

高天原を立出でて　三五教の宣傳使
高姫さんと諸共に　御空を翔ける磐船に
乘りてやう〳〵高春の　山の麓に着陸し
黄金の草をより分けて　霧の海をば探りつゝ
一歩々々急坂を　登つて來たのが天の森
巨岩怪石立並び　風光絶佳の靈地ぞと

二人は茲に息休め
龍神さんの祠なば
眺めて休らふ折柄に
何んとは無しにビリ〳〵と
震ひ出したる我身体
高姫さんは知らねども
確かに尊き神懸り
さはさり乍ら黒姫が
夢にも思はぬ囈語を
べラ〳〵喋つて高姫に
力の限り毒ついた
我師の君よ高姫よ
猫の目玉のくれ〳〵と
心の變る黒姫と
必ず思うて下さるな
此れには何か神界の
深い仕組のあるならん
曲津の軍いと多く

アルプス敎を開きたる
鷹依姫が右左
司と仕へしカーリンス
テーリスタンの兩人が
巖の上に横臥して
狐狸の空寢入り
樣子を窺ひ居ることに
黒姫早くも氣が付いて
ワザと師匠の高姫に
心に在らぬ事ばかり
申上げたは濟まないが
これも何かの御經綸
妾の心はそうぢやない
どうぞ赦して下さんせ
生命捧げた宣傳使
惡魔のはびこる此岩窟
如何なる憂を見るとても
言向和さで置くべきか

暫く待てよ高姫の　我師の君の宣傳使
朝日は照るとも曇るとも　月は盈つとも虧くるとも
假令大地は沈むとも　黒姫如何になるとても
三五教の神教を　天下に擴げにや置くものか
巖をも射貫く黒姫が　固き心の梓弓
矢竹心は高姫の　心の的に命中し
やがては疑雲隈も無く　天津日の如晴れるだろ
ア、惟神、惟神　御靈の幸を賜へかし

と謠つて居る。カーリンスは外より岩の戸を、鍵を以て押開け

カ「黒姫さん、教主樣がお召びになりました。大變な所へお入れ申して、さぞ御腹が立つたでせうが、こゝはどんな立波なお方でも、初めて這入つて來た方は、早くて三日遲いのは十日二十日と、此岩窟で修行をさすのが規則ですから、決して押籠たなどゝ思つては可けませぬぞや。三五教でさへも、岩窟の修行場が拵へてあるでせう」

黒「イエ〳〵決して惡くは思うて居ませぬ。斯樣な結構な所で修行をさして頂くなら、假令一月が二月、三年五年要つた所で、別に苦痛とは思ひませぬ」

カ「それは又大變な馬力ですな」

黒「オホ、、、」

と笑ひ乍ら、イソ〳〵として鷹依姫の前に現はれ

黒『これは〳〵教主様、結構な修行をさして戴きまして有難う御座います。成る程あの岩窟は心が靜まつて、結構で御座いますな』

鷹『結構でせうがな。あなたは身魂の洗錬が出來て居りますから、僅一時位で卒業が出來たのですよ。開教以來あなたの様に早く出た方は御座いませぬ。お芽出度う御座います』

黒『イヤ有難う御座いました』

と振り向く途端に、高姫の横たはる姿を見て打驚き

黒『ヤア高姫さんが縛切れて居らつしやる』

と顏の色をサツと變へた。鷹依姫は

鷹『オツホツホツホヽ、あんまりカーリンスと格闘をなさつたものだから、御疲勞なさつたものと見ます。お前さんは今見て居れば眞青の顏をしてビックリなさつたが、矢張り未練が有りますかい。斃つた人を座敷へも上げず、土間に寢かして置いたのは無殘の様に貴女は思つたでせうが、此れは一つの醫療法ですよ。お土のお蔭で血液の循環が元へ返り、息吹き返す様にしてあるのだ。やがて蘇生されるでせう』

黒『ナニ妾は高姫なんかに未練が有りますものか。こんな傲慢不遜な頑固者、今天の森で弟子の方から暇を與れてやつた所です。それを證據に、妾は貴女の弟子になりたいのですが、使つて下さいますか』

鷹『お前さんの云ふ事に間違ひなくば、喜んで手を引合うて行きませう』

黒『有難う御座います』

と云ひつゝ庭に下り、高姫の尻を力限りに握り拳を固めて、七つ八つ打ち

黒『コリヤ高姫、思ひ知つたか』

高姫は『ウーン』と息を吹く。

黒『オホ、、、能う斃ばつたものだ。此儘棄てゝおけば死んで了うのだが、併し此奴は貴女の御存じの通り如意寶珠の玉を呑んで居りますから、吐出さして、アルプス教の神寶にせなくてはなりますまい。何とかして大事に……イヤ〳〵大事にせなくてもよい。生き返らして生玉を取らねばなりませぬから、暫く助けてやつたらどうです』

鷹『黒姫さんの仰有る通り、一先づ生かして、玉を吐き出させねば、折角苦勞した効能が無い。玉さへ取れば後は煑て食はうと、燒いて食はうと、若い奴に呉れてやる。併し生き返らうかな』

黒『これは容易に恢復しますまい。何卒妾に任して下さるまいか。そうすればキット体を舊の通りにして、そうして折を考へ、生玉を引扱いて見せませう』

鷹『ア、そんならお前樣にお任せするから、宜しく賴みます』

黒『何と云つても玉を呑んで居るのだから、玉の納めてある室へ高姫の死骸を寢さし、妾が介抱をしてやりますから、極秘密に、誰にも分らぬ樣にして下さい。キット取つてお目に掛けます』

鷹『ア、そんなら御賴み申します。誰も這入つた事のない玉の居間、彼處には紫の夜

光の玉が納まつて居る。此れはアルプス教の生玉だから、誰にも見せないのだが、お前さんの精神を見屆けたから、其居間を一任しませう」

黒「それは〳〵實に望外の仕合せ、此上は粉骨碎身、アルプス教の爲に、犬馬の勞を借みませぬ」

鷹「妾も實は相談しやうにも相手がなくて困つて居つたのだ。御前さんが此處へ來て呉れたは天の與へ、肉身の妹が來たも同然だから、互にこれから了解し合うて、秘密の相談を致しませう。サア妾が案内をするから……」

と先に立つ。

黒「高姫の死骸を持つて行かねばなりますまい」

鷹「ア、さうでしたな。併し乍ら秘密室に誰も入れる事が出來ないのだから……」

黒「妾が携いで參りませう。……ヤイ高姫、お前は幸福者だ。一旦縁を切つた妾に又世話になるのか」

と口汚く罵り乍ら、脇にエチ〳〵引抱へ、足を引摺り乍ら、鷹依姫の後に從つて秘密室に這入つて行く。

鷹「こゝが大切な所だから、お前さん、高姫の息吹き返す樣に、鎭魂をしてやつて下さい。そうして時節を待ちて生玉を抜いて下さいや」

黒「何事も呑み込んで居ます。其代りに十日許り、二人前の食料を入れて下さい」

鷹依姫はニコ〳〵し乍ら、我居室に歸り、珍味佳肴を、ソッと秘密室へ持運び、素知

らぬ顔をして居た。高姫はムク〳〵と起上がり、四邊をキョロ〳〵見廻して

高『ア、妾は夢を見て居たのかいな。ア、黒姫さん、お前さんと天の森の龍神の祠で、從來に無い大喧嘩をして、それより惡い奴に喉を締められたと思つて居たが……ヤツパリ夢だつたか』

黒姫、あたりを憚る小聲にて

黒『高姫さん、決して夢ぢやありませぬ。こゝは高春山の割れ岩の岩窟……』

と耳に口を當て、何事かヒソ〳〵と囁いて居る。高姫は紫の玉を眺め

高『マア立派な玉が有りますな』

黒『これがアルプス教の性念玉です。此れさへ手に入れば、アルプス教は昌早寂滅、何とかして歸順させる方法は有りますまいかなア』

高『ナニ、有りますとも、妾が呑んで持つて歸ればいいのだ』

黒『何でもあなたは呑み込みが良いから便利ですなア』

高『練つて〳〵〳〵練り倒し、仕組の奥の生玉を呑み込んだ此妾、此玉の一つや二つ呑むのに何の手間暇が要りますものか』

と云ふより早く、玉を手に取り、クネ〳〵〳〵と撫で廻し、餅の樣に軟らかくして、グツと呑み込んで了つた。此時秘密室の外に、慌ただしく駈出す足音が聞えた。此れはテーリスタン、カーリンスの二人であつた。嗚呼、高姫、黒姫の運命は、如何なるであらうか。

（大正一一、五、一六、舊四、二〇、松村眞澄錄）

瑞　月

累卵の危き中に住みながら心もちわぬ人の多かり
我身魂われの所有とは思ふなよ髮一筋も儘ならぬ身は

六七六　夢の懸橋

高春山に割據するバラモン教の一派アルプス教の教主鷹依姫を言向け和すべく、言依別命の旨を奉じて天の磐樟船に乘り、勢ひよく聖地を出發した高姫、黑姫は殆んど三ケ月を經るも何の消息もない。言依別命は密かに龍國別、玉治別、國依別の三人の宣傳使を招き、聖地の何人にも明さず、高春山に二人の消息を探査すべく出張を命じた。龍國別はもと高城山の松姫館に仕へたる龍若の改名である。玉治別は田吾作、國依別は宗彥の改名である。

教の花も香ばしく　　咲き匂ひたる補仏の

山の麓に照り渡る　錦の宮を伏し拜み
言依別の命令を　密かに奉じて三人は
月の光を浴びながら　勇み進んで石原の驛
長田野、十師を夜の間に　栗毛の馬に跨りて
蹄の音も勇ましく　晨の風も福知山
尻に帆かけてブウ〳〵と　痩馬の尻をば放りながら
青野ケ原を右左　眺めて走る黒井村
心いそ〳〵石生の驛　御教畏み柏原の
田圃を越えて進み行く。

此處は神智地山の入口、アルプス教の鷹依姫が勢力範圍として居る十里四方の入口である。鬼の懸橋と云ふて、谷から谷へ天然に架け渡された一本の岩の橋がある。此處を通らねば何うしても高春山へ進む事が出來ない嶮要の地である。

幾百丈とも知れぬ山の頂きに天然に架け渡された石橋、眼下を流るゝ谷川の水は淙々として四邊に響き、自ら凄慘の氣に打たるゝ許りである。玉治別はこの橋の前に着くや否や、頓狂な聲を出して

玉『ヨー要害堅固の絶所だ。アルプス教の奴、仲々良い地點を撰んで關所にしやがつたものだなア。我戀は深谷川の鬼かけ橋、渡るは怖し、渡らねば、戀しと思ふ鷹依姫の鬼婆アさんに會はれない』

と無駄口を叩きながら半分許り進んで行つた。どうした機か、さしもに長い石橋は、中程より脆くも折れて、橋と共に玉治別は深き谷間に顚落し、泡立つ淵にドブンと落ち込んで仕舞つた。

龍國別、國依別は此の變事に膽を潰し

龍『ヤア、國さん、何うせう〳〵』

と顏を見合して驚きの浪に打たれて居る。

國『今日は何となしに氣分が惡い日だと思つて、石生の里から馬を放ちやり、三人かうしてテクついて來たが、まア〳〵結構だつた。馬にでも乘つて居らうものなら、玉治別と一所に馬も死んで仕舞ふところだつた』

龍『何を云つて居るのだ。馬位死んだつて諦めがつくが、肝腎の玉治別を谷底へ落して仕舞つて約らぬぢやないか。何とか考へねばなるまい。馬と同じやうに取扱はれては玉治別も可憐さうだ』

國『アヽさうだつた。餘り吃驚して狼狽へたのだ。サア河下へいつて、何處かの岩石に宿泊して居るだらうから、肉体なと探してやらねばなるまい』

と早くも引返す。龍國別も後についてトン〳〵と四五町ばかり引返し、谷川を彼方此方と眼配り、捜索し始めた。

いくら探しても影も形もない。二人は途方に暮れて施すべき手段もなく、悔し涙に暮れて居る。二三丁下手の方より

『オーイ、〳〵』

と呼ぶ者がある。二人は

『ハテなア、聞き覺えのある聲だ』

と聲する方に向つて駈出した。

見れば玉治別は谷川の中に立つ大岩石ホテルの露臺の上にて、着衣を一生懸命に絞つて居る。

龍『オー、お前は玉治別ぢやないか。何か變つた事はなかつたかなア』

玉『變つた事が大ありだ。堂々たる天下の宣傳使がお通り遊ばしたものだから、あれだけの大きい石の橋が脆くも折れよつて、忽ち玉治別のプロパガンディストは、數千丈の空中滑走を旨く演じ、無事御着水、直ぐ谷川の水に送られて殆んど下流十丁許り、忽ち變る男の洗濯婆アさん、今濡れ衣を壓搾して居る最中だ、アハヽヽ』

と平氣で笑つて居る。

國『オイ、貴樣は眞實の玉治別ではあるまい。あれだけ高い石橋から顚倒し、谷底の深淵へ墜落しながら、そんな平氣な顏して居れる筈がない。大方貴樣は化州だらう。オイ龍國別、ちつと合點が行かぬぢやないか』

龍『ア、さうだ。彼奴は何かの變化であらうよ』

と矢庭に眉毛に唾をつけて居る。

玉『實際は玉治別は死んだのだ。大岩石と共に墜落し、五體は木つ葉微塵、流血淋漓と

して谷水を紅に染め、忽ち變るインフエルノの血の河となつたと思ひきや、まアざつと此の通り御壯健體だ。オイ龍、國の兩人、お前も橋は無いが、あの橋詰から一遍飛び込んで見よ、隨分愉快だよ』

龍『益々怪しからぬ事を云ふ奴だ。オイ國依別さん、も少し下を探して死骸でも拾ふて歸らうぢやないか』

玉『お前の探す肝腎の玉は、この岩上に洗濯爺となつて鎭座坐しますのを知らぬのか。お前の考へはタマで間違つて居る。玉治別の宣傳使が二人もあつてたまるものかい。死骸を探すと云ふても、死なん者の死骸が何處にあるか。そんな至難の業はよしにせよ。苦勞の仕甲斐がないぞよ、アハヽヽヽ』

龍『本當に玉治別に間違ひは無いか』

玉『間違ひがあつて耐らうかい。お勝の婿の元の田吾作だ。これでもまだ疑ふのか。今の人民は薩張惡の心になりて仕舞ふて居るから、疑がきつうて何を云ふても誠に致さず、神も迷惑致すぞよ。改心なされよ。改心致せば盲も目があき、聾も耳が聞ゐるやうになるぞよ。燈臺下は眞つ闇がり、目の前に居る友達の眞僞が分らんとは、良くも茲迄曇つたものだぞよ。玉治別の神も、今の人民さまには往生致すぞよ。餘り鼻を高う致すと、鼻が邪魔して上も見ゐず、向ふも見ゐず、足許は尙見ゐぬやうになつて仕舞ふぞよ。開いた口が寒がらぬ。煎豆に花の咲いたやうな結構な御神德が、目の前にぶらついて居りながら、燈臺下は眞つ闇がり、ほんに可憐さうなものであるぞよ。

改心なされよ。改心致せば其日から目も見にるぞよ。身魂も光り出すぞよ。二人のお方、疑ひ晴らして下されよ。玉治別の幽宣傳使に間違ひはないぞよ。これが違ふたら神は此世に居らぬぞよ。餘り慢心を致して宣傳使が馬に乘つたり致すから、神罰を蒙つて、結構な神のかけた橋を折られ、谷川に落されて、アフンと致さならぬと云ふ實地正眞を見せてやつたのであるぞよ。高姫や黑姫を見て改心なされよ。結構な二本の足を神界から頂きながら、豪さうに飛行船に乘つて、惡魔の征服なぞと云つて出かけるものだから、今に行衛が知れぬでは無いか。我々は神の御用を致す宣傳使だ。鑑は何程でも出してあるから、鑑を見て改心致されよ。この玉治別は誠に結構な神が守護して御座るぞよ。明神の高倉、旭を眷屬と致して、身代りに立てたぞよ。人民の知らぬ事であるぞよ」

國「オイ〳〵田吾作、馬鹿にするない。貴樣は稻荷ぢやないか。稻荷なら稻荷ではつきりと云へ、俺はこれから貴樣の審神をしてやるから、早く素直に往生致さぬと、取り返しのつかぬ事が出來致すぞよ。ヂリ〳〵悶へ致しても後の祭り、苦しむのを見るのが可憐さうなから、氣もない中から氣をつけるぞよ。お前は俺の妹のお勝の婿に化けて居るが、早く往生致して「し心致せばよし、餘り我を張通すと、神界の規則に照らして帳を切るぞよ。外國行きに致すぞよ」

龍「こら〳〵何を云ふのだ。彼方にも此方にも、しやうもない神懸をやりやがつて、俺を馬鹿にするのか」

玉『神は直き〳〵に物は云はれぬから、田吾作の肉体を借りて氣をつけるぞよ。實地正眞の手本を見せてあるぞよ。大本の大橋越にてまだ先へ、行方分らぬ後戻り、慢心すると其通り、谷底へ落されて仕舞ふぞよ』

龍『ヱヽ、怪體な、早く眞實ものなら此方へ出て來い』

玉『眞實者でも贋者でも、何時迄もこんな所に立つて居れるかい。早く改心して呉れ、改心さへ出來たなら、神はいつでも谷を渡つて、其方へ行つてやるぞよ』

國『龍公の改心が出來ぬのは、度胆太い豆狸の守護神であるから、玉治別神様が御降臨、イヤ御降禮遊ばさんのは無理もないぞよ。早く豆狸や、野天狗の守護神を放り出して、神様に貰ふた生粹の水晶魂に研いて下されよ。神は嘘は申さぬぞよ』

龍『エヽ、兄と弟と寄りやがつて、此谷底で俺を馬鹿にしやがるのか』

玉『馬鹿にし度いは山々なれども、頂上に達した完全な馬鹿だから、此上もう馬鹿にしやうがないので、神も胸を痛めて居るぞよ』

龍國別、自暴自棄になつて

龍『餘り此世が登りつめて、惡魔許りの世になりて、神は三千年の苦勞艱難致して此世に現はれて見たなれど、餘り其邊中が穢しうて、足突つ込む所も、指一本おさへる處もありは致さぬぞよ。餘り此豆狸の身魂が世界を曇らしたによつて、神が仕組を致して、玉治別の身魂を懲戒のために、折れる筈のない石橋をボキンと折つて、神力を現はし、身魂の洗濯をして見せたぞよ。曇つた世の中にも、一人や二人は誠の者があ

らうかと思ふて、鐵の草鞋が破れる處迄探して見たが、唯た一人、誠の者が現はれたぞよ。これを地に致して三千世界の立替立直しを致すのであるぞよ。龍國別の身魂は誠に結構な因縁の身魂であるから、神が憑りて何彼の事を知らさねばならぬから、長らく御苦勞になりて居るぞよ。糞糟に落ちて居りて下されと神が申したら、一言も背かずに龍國別が聞いて下されたおかげによつて、神の大望成就致したぞよ。それについても因縁の悪い身魂は玉治別、國依別のガラクタであるぞよ。此身魂さへ改心致せば世界は一度に改心致すぞよ。この御方は誠に結構な清く尊い偉い立派な、世界にも一人とない生粹の根本の元の分靈であるから、神が憑りて大望な御用が仰せつけてあるぞよ。世界の者よ、龍國別の行ひを見て改心致されよ」

王「アハヽヽヽ、何奴も此奴も皆神懸りの真似ばかりしやがつた。サア〳〵こんな人足に相手になつて居れば日が暮れる。一遍出直して、再び出陣せうかい」

と、濡れた着物を脇に抱へ眞つ裸のまゝ、すた〳〵と、谷の流れを此方に渡り、坂道を谷沿ひに下り行く。二人は

「オーイ待て」

と後を追ふ。

折から俄に黒雲塞がり、咫尺も辨ぜざるに至つた。玉治別は

玉「オーイ〳〵二人の奴、俺の聲を目當について來い」

と力一杯呶鳴り立てた。

龍『ア、吃驚した。何だい、夜中に夢を見やがつて、大きな聲を出しよつて、寢られぬぢやないか』

國『アア俺もエライ夢を見て居つた。玉公の奴、鬼の懸橋から谷川に顚落し、軈て仕樣もない事を口走りよつたと思つたら、何だ、夢だつたか。錦の宮の高殿に七五三の太鼓が鳴りかけた。サア早くお禮をして言依別樣の、夜前俺達に云ひつけられた高春山征伐に向はうぢやないか』

折からの風に小雲川の水瀨の音は手に取る如く耳に入る。

言依別の御言もて　聖地を後に龍國の
別命の宣傳使　心の玉治別神

國依別を伴ひて　小雲の流れを溯り
高春山の鬼神を　征服せんと出で行きし
高姫、黑姫兩人を　助けにや山家の肥後の橋
膝の栗毛に鞭うちて　草鞋脚絆に身を固め
菅の小笠や草の簑　巡禮姿に身を窶し
谷を傳つてテク〳〵と　須知、蒲生野ケ原を過ぎ
觀音峠も乘り越えて　敎への花の咲き匂ふ
珍の園部や小山鄕　翼なけれど鳥羽の里
道も廣瀨の川傳ひ　高城山を右手に見て

名さへ目出度き龜山の　珍の館に着きにける。

茲には梅照彦、梅照姫の二人。言依別命の命を奉じ、小やかな館を建て、教を遠近に傳へて居た。三人の姿に驚いて梅照姫は奥に駈入り

梅照姫『モシ〳〵梅照彦様、妙な男が三人やつて來ました。さうして門口に立つて動きませぬ。何う致しませうか』

梅照彦『誰人か知らぬが、服裝が惡くつても、如何なる神様が化けて御座るか知れないから、鄭重にお迎へ申したらよからう』

梅照姫は召使ひの春と云ふ男を招き

姫『何人か門に來て居られる筈だから、鄭重にお迎へ申して來なさい』

春『承知致しました』

と門口に走つて出た。其邊をきよろ〳〵見廻しながら獨り言

春『庭長にせよと仰有るから迎ひに出たが、誰も居やせぬぢやないか。乞食が三人居る許りで、大切のお客さんは見にはせぬ。ハヽア、もう、つい御座るのであらう。オイ其處な乞食共、其處退いて呉れ。唯今庭長さんがお越しになるのだから、お前のやうな乞食が門口に立つて居ると、見つとも好くない。サア〳〵何處かへ往つたり〳〵』

龍『貴方は當家の召使ひですか。梅照彦は居られますかな』

春『エヽ、何をごて〳〵云ふのだ。人を見下げて召使ひかなんて、其樣なものとは些こ違ふのだ』

龍「然らば貴方が當家の御主人ですか」

春「マア〳〵何うでもよい哩。どつちぞの中ぢや」

龍「御主人とあれば、一寸承はり度い事があつて參りました」

春「そんな者に當家の主人は用が無い哩。早く何處かへ退散せぬか。今庭長さんがお越しになるのだ。邪魔を致すと此箒で撲りつけるぞ」

玉「こりや、お前は此處の召使だらう。下男だらう。門前に三人の宣傳使が見て居るのに主人にも取り次がず、追ひ出すと云ふ事があるものか。早く取り次で呉れ」

春「取り次がぬ事も無いが、今日は俄にお取込みが出來たのだ。庭長さんがお出になるのだから、何れ御馳走をせなくてはならぬ、さうすれば又ちつとは餘るから、明日除けて置いてやるから、更めて出て來い。それ迄其邊うちを迂路ついて、今日はまア他家で貰ふが好からう」

玉「お前は我々を乞食と見て居るのだなア。そりや餘りぢやないか」

春「餘りも糞もあつたものかい。縱から見ても、横から見ても乞食に間違ひはない。餘りぢやと云ふたが、今日は御馳走が餘るとも餘らぬとも見當がつかぬ。明日出て來い屹度握り飯のあんまりを一つ位は俺がそつと除けて置いてやる。貴樣も腹が減つとるだらうが、まア辛棒をして居れ。俺だつて生れつきの惡人ぢやない。つい十日程前まで、俺も乞食に歩いて、道の端で飢に迫り、倒れて居つたところ、此處の主人が拾ひ上げて下さつたのだから、何處迄も大切に此門を守らねばならぬのだ。何卒輒みだか

ら暫く他家へ行つて居て呉れ。今庭長さんがお見えになるのだ。若しその庭長さんが、此家の主人にでも何かの端に、此方の門口には乞食が三人立つて居ましたと云はつしやらうものなら、それこそ俺は此家を放り出されて又元の乞食になり、お前等の仲間に逆轉せなくてはならぬから、何うぞこゝは俺を助けると思つて、暫らく退却して呉れ。乞食の味は俺もよく知つて居る。辛いものだ。本當に同情するよ。譯の分らぬ無慈悲の奴だと恨めて呉れな」

國依別は大聲を發し

國「梅照彦〳〵」

と呶鳴つた。春は吃驚して

春「コラ〳〵、そんな非道い事を云ふものぢやない。俺が叱られるぢやないか。乞食が云ふたと思はずに、俺が主人を呼び捨てにしたやうに取られては耐らぬぢやないか。些とは俺の身にもなつて呉れ」

龍、玉、國の三人の宣傳使は一時に聲を揃へて

「梅照彦〳〵」

と呶鳴つた。春は

春「やアこいつは耐らぬ、ぢやと云ふて人の口に戸を立てる譯にも行かないわ。一つ奥へ往つて言ひ譯をして來う」

ヒバタ〳〵と奥に駈込んだ。

梅「お客さんはどうなつたか。早くこちらへ御案内せぬか」

春「イヤ、未だ見ねませぬ。何うしてこんなに遲いのでせうなア」

梅「今何だか大勢の聲がしたではないか」

春「あれは乞食が歌を謠つて御門前を通つたのですよ」

梅「お前の聲ではなかつたかな」

春「イエ〳〵滅相もない、誰人が御主人樣を梅照彦なんて呼びつけに致しますものか。何でも貴方のお名を知つて居る乞食が云つたのでせう」

梅「ハテナ、それでも梅照姫が、今門口に三人のお方が門を開けて吳れと云ふてお待ちになつて居ると云ふて居た。今御膳の仕度をすると云ふて炊事場の方にいきよつたがもうお客さんは歸つて仕舞はれたのかなア」

春「イヽエ、まだお客さんは見ねませぬ。唯三人の見すぼらしい乞食が、簑笠を着て門傍に立つて居ります」

梅「何、まだ立つて居られるか」

春「御主人樣、貴方はあんな乞食に叮嚀な言葉をお使ひになるのですなア」

梅「乞食だつて誰人だつて同じ神樣から生れた人間だ、叮嚀に致さねばならぬではないか」

春「それでも私に對しては餘り叮嚀ぢやありませぬな。いつも春、春と呼びつけになさるでせう」

梅「そんならこれから、春さんと云ふたらお氣に入りますかなア」

春「御尤もでござりますなア」

斯く話す折しも門口に宣傳歌が聞ゑて來た。

神が表に現はれて　善と惡とを立て別ける
此世を造りし神直日　心も廣き大直日
唯何事も人の世は　直日に見直せ聞き直せ
身の過ちは詔り直す　三五教の神の教
四方に傳ふる龜山の　珍の館を守り居る
梅照彦の門の前　遙々尋ねて來て見れば

佇み居たる山の神　我等の姿を見るよりも
踵を返し奥に入る　嗚呼訝かしやゝ
主人の妻か下婢か　不思議と門に立ち止まり
門の開くを待つうちに　躍り出たる下男
我等の前に竹箒　掃出すやうな捨言葉
府長さんが來るまで　歸つて呉れいと頑張つて
又もや門をピシヤと締め　蒼惶姿を隱しけり
汝梅照彦司　三五教の御教を
何と思ふか世の人を　貴賤老幼別ちなく

救ひ助けて皇神の
世人を守る神司
もはや汝は忘れしか
體主靈從利己主義を
神の教に非ずして
我は御國を救はんと
そぼち濡れつつ高春の
神の教の司なる
世人を救ふ神柱
教の徳に靡かせつ
世にも尊き天職を
神の教を笠に着て
發揮し居るは三五の
バラモン教の行り方ぞ
晨の風や夕の雨
山に向ふてアルプスの
鷹依姫を言向けて
言依別の御言もて

漸々此處に來たりしぞ
今現はれた下男
貴き衣を身に纏ひ
喜び迎へ入れながら
唯一言に膠もなく
全く汝が指金か
詳細に御答に致されよ
月は盈つとも虧くるとも
神に仕へし身の上は
汝が日頃のやり方は
言葉の端に能く見にる
表面を飾る曲人を
服裝卑しき我々を
追ひ歸さんと努むるは
但は下男の誤りか
朝日は照るとも曇るとも
假令大地は沈むとも
如何なる卑しき姿をも

如何なる見惡き服裝せる
救ひ助けにやおかれまい
救ひの道を忘れしか
神の勅を畏みて
我等一行三人連れ
國依別の宣傳使
あゝ惟神〳〵
早や暮れかかる冬の日を
御山を指して進むべし

乞食の端に至るまで
汝は易きに狎れ過ぎて
神は我等と倶にあり
曲津の征途に上り行く
龍國別や玉治別
茲に暇を告げまつる
御靈の恩頼を蒙ぶりて
御稜威も高き高熊の
梅照彦よ妻神よ

隨分お健でお達者で
私はこれにて暇乞ひ
指をり數へて待ち玉へ
門前拂ひを喰はされて
これも何かのお仕組か
決して世界に鬼は無い
梅照彦の鬼が坐す
お氣に障れば赦してよ
御靈の幸を賜へかし

神のお道に盡されよ
三鬼の司が凱旋を
さア〳〵往かうさア往かう
餘り嬉しうは無けれども
行けるとこ迄行つて見やう
三五教の身の内に
もしや我等の云ふ事が
あゝ惟神〳〵

と玉治別は大聲にて心の丈を謠ひ終つた。梅照彦は此歌を聞くや驚いて表門に駈けつけ砂上に首を下げ

梅『これは〳〵宣傳使様で御座いましたか。誠に下男が粗忽を致しまして、申譯が御座いませぬ。さア〳〵何うぞお這入り下さいませ』

玉『イヤ有難う。かういふ立派なお館へ乞食が這入りましては、お館の名譽にかゝはりますから、今日はまアこれで御免を蒙りませう』

梅『お腹立御尤もで御座いませうが、つい失禮致しまして、全く下男の業で御座いますから、何うぞ許して下さいませ。サア〳〵御機嫌直してトットと、お這入り下さいませ。コレ梅照姫、春公、お詫を申上げないか』

と呶鳴つて居る。二人は此聲に驚いて樣子は分らねど、梅照彦が土下座をして居るのを見て、自分も同じく大地に平伏して首を下げた。

玉『今貴方は下男が惡いのだと云はれましたな。決して下男ぢやありませぬよ。責任は矢張主人にある。さう云ふ氣のつかない馬鹿な男を門番にするのが第一過りだ』

梅『ハイ、何と仰せられましても辯解の辭がありませぬ』

龍『サア、事が分れば好いぢやないか。玉治別さん、國依別さん、お世話になりませうか』

と先に立つて進み入る。二人もニコ〳〵しながら

玉、國『アア、エライお氣を揉ませました。もうこれで一切の經緯は帳消だ。さア梅照

彦御夫婦さま、春さん、何うぞ安心して下さいませ」

梅「有難う御座います」

と安心の胸を撫で下し、、妻諸共三人の後に従て奥に入る。春公は門の傍に佇立し

春「ア、庭長さんの御挨拶だつた。お蔭で免職もどうやら免れたやうだ」

（大正一一、五、一六、舊四、二〇、加藤明子録）

六七七　月休殿

龍國別、玉治別、國依別の三人は珍の舘の奥の室に打通り、梅照姫が調理せし晩餐に舌鼓を打ち、主客打ち解けて四方八方の話に耽つた。

梅照彦「最前の玉治別様のお歌に依つて、津の國の高春山へお出でになる事を承知致しました。然し乍ら此方から御出でになるのは、少し迂回ではありませぬか」

玉「少し迂回ですが是には理由があるのです。實は福知山の方面から柏原を通り、鬼の懸橋を渡つて參る積りでしたが、出發の前夜に大變な夢を見まして……それで此方へ住ひ變へたのです。そうして玉照彦様のお出ましになつた、高熊山の岩窟を拜して行

くのが順當だと氣がついたのです。惡魔に對し言靈戰を開始するのですから、餘程修業をして參らねばなりませぬ。高姫、黑姫の宣傳使は、不覺にも飛行船に乘つて只一息に苦勞も無しに、高い所から敵を威喝しようと思つて出たものですから、三ケ月有餘も經つた今日何の消息も無し、それが爲めに言依別命が我々を密かにお遣はしになるのです。聖地の人々は我々三人以外、誰一人知つて居ないのです。バラモン教やアルプス教の間者が澤山に信者となつて化込んで居りますから、うつかりした事は言はれないのです。又假令異教の間者が居らないにしても、幹部の連中や信者に知らせますと、直に如何な大切の事でも喋つて仕舞ひますから困つたものですよ。何故あれだけ秘密が守れないのかと不思議な位です。三人の外に誰にも言ふなと仰有つたのですから、秘密は何處迄も守らねばなりませぬからなア」

國「オヽ、玉さん、お前は幹部が喋舌ると今言つたが、我々兩人が何も言はないのに、お前は斯んな秘密を門前で大きな聲で謠つたじやないか。猿の尻笑ひと言ふのはお前の事だよ」

龍「ハヽヽヽヽ、到頭秘密が曝れて仕舞つたぢやないか。「之は秘密だからお前さんより外には言はないから、誰にも言つて下さるな」と口止めする。聞いた人は「諾々決して言はぬ」と言ひ乍ら、又次の人に「此奴ア秘密だから誰にも言はれぬ、お前だけに言つたのだから、屹度他言はして呉れるな」と口止めする。又次から次へと其通り繰返されるものだ。そして一人より言はないと言つた者が、會ふ人毎に尋ねもせぬの

に「お前一人だけだ」と言つて、終には秘密の方が擴がるものだ。表向、廣告的に言つたものは、誰も耳に止めないから却て擴まらないものだ。「お前一人と定めて置いて、浮氣や其日の出來心」式だから困つたものだ。なア國さん」

國「さうですな、此筆法を宣傳に應用したら如何でせう。不言講とか言つて「お前丈けに結構な事を聞かしてやるのだから、主人にでも……假令我子にでも女房にでも言ふ事はならぬ」と口止めをして置くと、其男は「俺は身魂が立派だから、誰も知らぬ事を神樣から、彼れの口を通して言つて下さつたのだ」「俺の身魂は立派だから、神慮に叶つて居るから、斯う言ふ大切な事を知らして貰へるのだ」と思つて自慢相に人々に秘密々々と言つては喋り散らす、それが却て能く擴まる樣なものだ。三五教の宣傳使も、其筆法を應用したら、却て良いかも知れないぞ、アハヽヽ」

玉「然しそれは……そうとして、梅照彦さんはそんな輕薄な御方ぢや無いから、屹度秘密を守られるでせう」

梅「私は守る積りですが、女房や下男が……餘り大きな聲で仰有つたものだから……全部聞いて居りませう。そいつア何うも請合ふ事は出來ませぬなア」

玉「困つた事だ。何卒成就するまで他へ洩れない樣に……喋舌られては困るから……どうか暫時奥さんと下男とは座敷牢にでも入れて、人に會はさない樣にして下さいますまいかなア」

梅照姫「オホヽヽヽ、妾は滅多に言ひませぬが、貴方言はぬ樣に成されませ。屹度道々

秘密を開け放しにして、何も彼もみんな仰有るでせう」

玉「イヤ〳〵決して〳〵、餘りむかついたものですから、つい門口で脫線したのです」

姫「餘程言靈鐵道の敷設工事が請負と見ゐて、粗末な事がしてあると見ゐますなア、ホ、、、、」

龍「何分宇都山村の田吾作時代には、隨分狠狽者の大將だと言ふ評判でしたから、矢張三つ兒の癖は百歲迄とか言つて仕方の無いものです哩」

玉「そんな昔の事をさらけ出して、人の前で言ふものぢやない。龍國別さん、私が出立の際に「何卒誰にも玉治別は宇都山村の田吾作だと云つて下さるな、秘密にして下さい」と賴んだ時「俺も男だ、ヨシ、言はぬと云つたら首が千切れても言はない」と言明し乍ら、三日も經たぬ間に秘密を明かすとは何の事だ。餘り人の事を云ふものぢやありませぬぞ。自分の過失は分らぬものと見ゐますな」

龍「ヤア此奴ア縮尻つた。然し乍らお前が田吾作だつたと言つた所で、今回の作戰計畫に齟齬を來す樣な大問題ぢや無いから……マア大目に見るのだなア」

玉「小さい事だと云つて秘密を洩らしても良いのですか。小さい事を洩らすやうな人は矢張大事を洩らすものですよ。蟻穴堤防を崩すとか言つて、極微細な事から大失敗を演ずるものだ。如何です。オイ龍さん」

龍「ヤア大變な速射砲を向けられて……イヤもう恐れ入りました。只今限り屹度慎みませう」

梅『皆さま、お疲勞でせうから、もうお寢みなさいませ』

玉『何時迄も攻撃ばかり受けて居つても詮らない。ア、お迎ひが出て來た樣だ。アーアッ』

と口の引裂ける樣な欠伸をなし、目を擦つて居る。

姫『サア、お寢みなさいませ。奥の室に寢床が敷いて御座いますから』

玉『皆さん、お先へ』

と奥の室に入るや否や、雷の如き鼾をかいて他愛も無く寢入つて了つた。二人は續いて

龍、國『左樣なれば寢ませて頂きませう』

と奥の室に入る。玉治別の粥を煮る大きな鼾が耳に這入つて二人とも寢就かれず、そつと裏口を開けて、月を賞め乍ら庭園を逍遙きはじめた。

龍『ア、佳い月だな。秋の月も佳いが、冬の月も又格別綺麗な樣だ。あの月の中に猿と兎が餅を搗いて居ると云ふ事だが、一つ我々に搗落して呉れそうなものだなア』

國『アハ、、、、八日目が來たら落して呉れます哩』

龍『卯月八日、花より團子と言つて、ありや餅ぢやない。團子ぢや』

國『團子でも餅でも、矢張り搗かねばならぬ』

龍『團子は月が落すのぢや無い。此方から搗いて上げるのだよ。竹の先に躑躅の花と一所に括つてな……』

國『その上げた團子を搖すつて落して喰つて呉れるのだ。十五の月は望月（餅搗）と云

ふから、屹度十五日になれば餅搗するに違ひない」

龍「良い加減に洒落て置かぬか。お月さまに耻かしいぞよ」

國「三五の月の御教を開く我々宣傳使は、何……月に遠慮する事があらうかい。子がお母アさんになんぞお呉れと言つて、駄々と團子をこねる樣な心餠で居るのだよ、アハ、、、」

龍「あのお月さんの顏には痘痕が出來て居るじやないか。圓滿清朗、月の如しと言ふけれど、餘りあの痘痕面では立派でも無い樣だ。月は玉兎と云ふからには、ドコか玉治別の圓い御面相に似た所がある樣ぢや無いか」

國「玉治別の面の樣に見たてるのは、依然あれは地球の影が映つて居るのだ。白い所は水、黑い所は陸地だ。天體學の事なら何でも此國さんに尋ねたら聞かしてやらう」

龍「アハ、、、、瑞月靈界物語の第四篇を讀んだのだらう」

國「そんな本が何處にあるのだ」

龍「三十五万年の未來に活版刷で天聲社から發行せられた單行本だ。それに出て居るぢやないか。貴樣はまだ見た事が無いのだなア。あれだけ名高い名著を知らないとは餘程時代遲れだなア」

國「未來の著述は見ても見ぬ顏をして居るものだ。世の中が開けて來ると種々の學者とやら、役者とやらが出て來て、屁理窟を言つて飯食ふ種にする奴があるから、……それを思ふと俺も愛想が月さんだよ、まア現在の事でさへも分らないのに、未來の事ま

での研究は廢めて置かうかい。三五教の其時代の宣傳使でさへも、讀んで居ないものがある位だからなア」

龍「未來の宣傳使は無謀なものだなア。しかし大分に夜露を浴びた樣だが、もう徐々歸つて寢間に横たはらうぢやないか」

國「俺はもう少時散歩する。却て一人の方が都合が好いから……お前は先へ寢たが宜からう。又肝腎の時になつて寢むたがると困るからなア」

龍「そんならお先へ御免を蒙る。お前は、ゆつくりお月さんとオッキ合ひ話でもするが良い哩。近い所に御座るからよく聞ねるだらう」

國「きまつた事だ。お月樣の分靈が……これ見い、此通り……草の上にも玉の如く輝いて御座る。貴樣の鬚にも澤山に天降つて御座るぢやないか。神樣の御威德は斯んなものだ。貴樣はお月樣は只御一体で大空ばつかりに居られると思つて居るやうだが、仁慈無限の彌勒樣だから、草の片葉に至る迄此通り惠みの露を降して輝き給ふではないか」

龍「成る程、さう言へば……さうだ。是だけは國さんの嘘月でも間誤月でもない、併し雨露月だなア」

國「分つたか、「月二つ擔ふて歸る水貫ひ」と云つて、一荷の桶水の中にも御叮嚀に一ツづゝお月樣は御守護して下さるのだ」

龍「よく分りました。モウ之位で御中止を願ひます」

國「馬鹿云ふな。此處は月の名所、月宮殿の御境内だ。これ丈け結構な月の光を拜んで此儘寢ると云ふ事があるものか。サア今の内に月宮殿へ參拜して、其上で寢まうじやないか」

龍「ウン、それもさうだ。そんなら一つ是からお參詣して來うか。天には寒月、地には迂露月の影ふるうだ、アハヽヽ」

兩人「サア行かう」

と兩人は蒼鬱とした森影に建てられたお宮の前に、すた〳〵と進み行く。

二人は月の森の月宮殿の階段を登りながら

龍「結構な月だが、斯う蒼鬱と樹木が茂つて居ると、肝腎の月宮殿は暗も同樣ぢやないか。此月宮殿は暗宮殿だ。これ程綺麗なお月樣が祀つてあるのに、何故此森が明くないのだらう」

國「馬鹿言ふな。之は晦の月宮殿と言つて、お月樣のお休み遊ばす御殿だ。宮と云ふ字は休と云ふ字に改めさへすれば名實相適うのだ。イヤ明月相反すと言ふのだ、アハヽヽ」

神殿の何處ともなく

「ガサ〳〵グヽヽ」

と怪しき物音が聞ゐて來る。

龍「ヤア此宮は大變古いと思へば、貂か鼬が巣をしてると見ゐて、大變に暴れて居るじ

やないか。「月は天に澄み渡る」と詩人が言つて居るが、貂は月の宮に棲み渡り頭から糞、小便を垂れ流すじやないか。之を思へば月宮殿も蕩張愛想が月の宮じや。此宮も貂や鼬の棲處となつては最早運の月だなァ」

國「人間の運命にも榮枯盛衰がある。潮にも滿干がある。此宮さんは今は干潮時じや。それだからこう見窄らしく荒廢して居るのだ。之でも五六七の世に成れば、此お宮は金光燦然として闇を照し、高大原の靈國にある月宮殿の樣になるのだが、何程結構な彌勒さまのお宮でも、時を得ざればこんなものだ。信眞の德の失せたる世の中の姿が遺憾なく此お宮に寫されてあるのだ。嗚呼如何にせんやだ」

龍「さうだなァ、社會の時代的反映かも知れないなァ。神樣が頭から四足に糞や小便をかけられ、四足と同居して御座る樣では御神德も何もあつたものじや無い。御神德さへあれば、こんな失敬な……神樣の頭の上へ上つて糞や小便を垂れる奴に、罰を當て動けない樣に靈縛なさりさうなものじやないか」

社の後より

「此方は月の大神であるぞよ。汝三五教の宣傳使、龍國別、國依別の盲目共、否魔誤月、嘘月、キヨロ月人足、神の申す事を耳を浚へてよつく聞け。神は人間の信眞の頭に宿る、決して畜生等には神の聖靈は宿らないぞ。畜生には人間の副靈が宿つて居るのだ。それだから神殿に鼬や貂等が小便を垂れ樣が、糞を垂れ樣が、放任してあるのだ。元來が畜生の因緣を以て生れて來て居るからだ。神は人間らしき人間が無禮を

致した時は即座に神罰を與ふるぞ。只今の世の中は獸が人間の皮を被り、白日天下を横行闊歩する暗の世だ。今、此處へ人一化九の妖怪が二匹も現はれて來よつたが、之も人間で無いから神罰は當ないで差赦してやらう。サア如何じや、人間なれば人間と判然申せ。四足の容器なれば容器で御座いますと白狀致せ。神の方にも考へがあるぞよ」

國、小聲で龍國別に向ひ

國「オイ、何だらうな。ちらい事を言ふじやないか」

龍「あんまり神樣の惡い事を言つたものだから、神さまが怒つて御座るのかも知れないよ」

國「罰が當る樣なことは出來はしまいかな」

龍「サア、其處じやて。俺も一つ如何言はうか知らんと思つて心配をして居るのだ。結構な神の生宮たる萬物の靈長、大和魂の人間で御座いますと言へば、直に神罰を當られて如何な目に遭はされるか知れないし、四足の容器と言へば、お咎めは無いけれども本守護神に對して申譯が立たぬなり、自分も何だか阿呆らしくて、卑怯未練にもそんな事は言はれぬじやないか」

宮の御殿より

「人間か、四足か、早く返答致せ。四足と有体に白狀すれば今日は赦して遣はす。人間と申せば此儘汝の生命を取つて、根の國、底の國へ追ひやつてやらう。サア早く返

答を致さぬか」

龍「ハイ、一寸待つて下さいませ。今鳩首謀議の最中で御座います。相談が纏まつた上御返事を申上げます」

宮の中より

「エー、これしきの問題に凝議も何もあつたものか、一目瞭然だ。早く返答致せ。四足に間違ひあるまいがな」

兩人「へ……そ……それは……あんまり……殺生で御座います……」

宮の中より

「それなら誠の人間と申すのか」

國「ハイ……まア〳〵人間が半分……畜生が半分で人獸合一の身魂で御座います」

宮の中より

「然らば獸の分だけは赦して遣はす。半分の人間を之から成敗致す。耳一つ、眼玉一つ、鼻一つ、下腮を取り、手一本、足一本引き抜いてやらう。有難う思へ」

龍「ヤア、もう何卒今度に限り大目に見て下さいませ」

宮の中より

「何、大目に見て呉れと申すか、蛇の目の唐傘の樣な大きな目で睨んでやらうか」

國「イエ〳〵滅相な、そんな目で睨まれては此方も……め、、、、迷惑を致します」

宮の中より

『此方も時節の力で斯くの如く屋根は雨漏り、鼬、貂の棲處と成り、些か迷惑を致して居る。どうか此方の片腕になる者が欲しいと思つて居た矢先だ。いやでも應でも其方達の片腕を取つてやらう』

龍『滅相もない、片腕どころか、彌勒樣の爲めなら兩腕を差上げて粉骨碎身して盡しますから、お賴み申します』

と泣き入る。宮の中より

『よし〳〵、粉骨碎身は注文通り赦してやらう。サア脇立、眷族共、兩人の骨を粉にし身を碎いて參れ。粉骨碎身して盡さして呉れゝと願ひよつた』

龍『モシ〳〵、その粉骨碎身の意味が違ひます。そう早取りをして貰つては困ります』

宮の中より

『粉骨碎身とは讀んで字の如しだ。神は正直だから誤魔化しは、ちつとも聞かぬぞよ』

國『オイ龍、此奴アちつと怪しいぞ』

龍『さうだなア、田吾作の聲に似ては居やせぬかなア』

宮の中より

『コラ〳〵兩人、其方はまだ疑ふのか。此方は空に輝く月の玉治別命、又の御名は田吾作彦の大神であつたぞよ。ワッハヽヽ』

龍『あんまり馬鹿にすない。俺の膽玉を大方潰して仕舞ひやがつた』

國「こら、惡戯けた眞似をしやがると承知をせぬぞ」

玉「膽玉ばかりじや無からう。睾丸が潰れかけただらう、アハヽヽヽ」

と笑ひ乍ら、ドシン〳〵と朽果てた階段を降つて來る。三人は笑ひ乍ら梅照彦の館を指して、月を仰ぎつゝ門前に着いた。梅照彦、梅照姫は

「ヤア貴方等、何處へ行つて居られました。俄に三人樣のお姿が見えぬので、何かお氣に障つてお歸りになつたかと思ひ、大變に膽を潰しました」

玉「睾丸は大丈夫ですかな、アハヽヽヽ」

龍「實は我々兩人は餘り月が佳いので、つい浮かれて散歩をし……月宮殿に參拜して……」

玉「膽玉を潰しました」

龍「お前、默つて居れ。人の話の尻を取るものじやない」

玉「何、尻は取たくないが睾丸が取り度いのだ、アハヽヽヽ」

國「月宮殿と云ふ所は妙な處ですな。貂が物言ひましたよ。而も神さんの聲色を使つて……てんと合點の往かぬ事です哩」

梅「エ、貂が物言ひましたか、そりや聞き始めだ。何と云ふ貂でせう」

國「何でも田吾作とか言ふ貂で、鼬の成上りださうです。隨分氣轉の利かぬ馬鹿貂でした、アハヽヽヽ」

一同腹を抱へて「アハヽヽヽ」と笑ひ轉ける。

（大正一一、五、一六、舊四、二〇、北村隆光録）

瑞月

聞く人の心によりて善くも見い惡くも見ゆるこれの神教
麓より　中程までは　雨降れど　頂上は晴れつ　富士の神山

六七八　砂利喰

梅照彦が朝夕に
珍の館を後にして
玉照彦の生れませる
心を洗ひ魂清め
來勿止館の門前に
足に任せて進み行く
境峠を打渡り

神の教を宣り傳ふ
こゝに三人の宣傳使
高熊山の巖窟に
神國守に送られて
暇を告げてスタ〳〵と
天狗の岩にて名も高き
小幡の川の上流を

尻を捲つて對岸　青野ケ原を右左
眺めて進む法貴谷　戸隱岩の前に着く。

三人は激湍飛沫の音高き谷川に沿へる、樹木鬱蒼たる谷道をエチ〳〵登つて、漸く戸隱岩の麓に着いた。此處に路傍の岩に腰打掛け、息を休めてゐる。其處より一丁許り離れた坂道に五六人の怪しき男の影、何か頻りに囁いてゐる。

玉『龍國別さん、國依別の兄貴さん、何だ、向ふの方に怪体な奴が囁いてゐるぢやないか。此の山道に何をして居るのだらうかな』

國『彼れは泥棒の群だ。往來の人の衣類持物を、すつかり脱がせる追剝商賣が現はれたのだよ。最前も眞裸体になつて女が泣きもつて通つたゞろう。彼れは屹度的さんにやられたのに違ひないぞ。俺達も斯うして蓑笠を着て歩いて居るものだから、彼の女も吾々を同類と見よつたか、恐さうにキヤーと云つて一目散に遁げたぢやないか』

龍『それに間違ひは無い。吾々も屹度脱がされるのだな。一つ此處で何とか考へねばなるまいぞ』

玉『なアに、往くとこ迄行つて見な分るものか、刹那心だ。取越苦勞をするに及ばないぞ。萬々一向方が泥棒だつたら、此方が率先して泥棒の假聲を使ひ、泥棒仲間に交つて、彼奴等をうまく改心させるのだな。木花姫命様は三十三相に身を現じ、盗人を改心させやうと思へば自分から盗人になつて、一所に働いて見て「オイ、盗人と云ふものは隨分世間の狹いもの、怖ろしいものだ。斯んな詮らない事は止めて、天下晴れ

ての正業に就かうぢやないか」と云つて、盗人を改心させなさると云ふことだ。酒飲みを改心させるには、自分も一所に酒を飲み、賭博打ちを改心させるには、自分も賭博打ちになつて、さうして改心させるのが神様の御經綸だ。吾々も一つ向方が盗人だつたら、此方も盗人に化けて、手を曳合うて仲間入りをなし、さうして改心させれば良いのだ」

國「なんぼ何うでも、盗人だけは止めたいなア」

玉「ナニ、心から盗人になれと云ふのぢやない。盗人を止めさせる爲の手段だから、構はぬぢやないか。それが觀自在天の身魂の働きだ。万一先方が盗人であつたら、此の玉さんが俺は盗賊の親方だと云つて威喝するのだから、お前達は俺の子分に化けて居るのだぞ。さうして龍國別とか、國依別とか、斯んな賊名を唱へては先方に悟られるから、此處で名を暫らく改へて龍公、國公、玉公親分で行くことにせう。向ふから「オイ旅人一寸待つた、持物一切渡して行かつせエ」なんて言はれてからは面白くないのだ。オイ龍公、國公、玉公親分さんに從いて來い」

龍「到頭宣傳使を泥棒の乾兒にして了ひやがつた」

國「エーこれも仕方がない。觀自在天の御化身になると思へば、辛抱も出來ぬことはない、サア玉公親分、先へ行つて下さい」

玉「治別は先に立ち大手を振り乍ら、五六人の男の車座になつて道を塞いで居る前に近

づき見れば、今剝ぎ取つたらしき女の衣服が傍に在るに氣が附いた。的切り此奴は泥棒と、玉治別は、わざと大きな聲で

玉「オイ龍、國、早く來んかい。彼處に五六人の男が居る。彼奴の着物をフン奪つて眞裸にしてやるのだ」

と進んで行く。五六人の泥棒は此聲を聞いて何れも呆氣にとられてゐる。

玉「コリヤ木葉泥棒、俺を誰だと思つて居るか。三國ケ嶽の鬼婆の片腕と聞いたる、大泥棒の玉公親分さんぢやぞ。サア持物一切此方にすつぱりと渡さばよし、愚圖々々吐すと何奴も此奴も一蓮托生、素首を引抜いて了ふぞ」

甲「喧しう云ふない。俺だつて同じことだ。商賣の好みで、俺達の着物だけは堪へて呉れ」

玉「堪へて呉れとぬかしやァ話の次第によつては堪へぬ事も無いが、何うだ一枚だけ俺に渡さないか。大難を小難にして赦してやるのだから」

乙「モシ親方、一寸待つて下さい。今吾々が集會を致しまして、ヌースー會社の創立委員となり、株式募集の協議の最中でございます。貴方もどうぞ澤山株を持つて下さい品に依つたら社長さんに推薦するかも知れませぬから」

玉「俺は株は持つてはやろうが、一番の親方だから株代は拂はないぞ。優先株を八百萬株許り俺に献上致せ。さうすれば徹胴布設でも何でも　うまく認可してやろう」

甲「そんな認可をして貰つたつて、此の泥棒會社に用は無い。徹胴乃過や無錢出ン話や

田紳の御かげで、吾々の商賣の大變邪魔になつて居るのだから、そんなものは要らないわ」

玉「貴様は矢張狐鼠盗人だな。通行人の着物位脱がして虐めて何になるかい。モット羽織袴を着たり、洋服をつけて立派に萬年筆の先で、一遍に難澁萬、難迫萬、難船萬と云ふ泥棒をせぬのかい。徹胴敷設をすればレールを嚙ぢり、道路を開鑿すれば砂利を嚙ぢり、軍艦を拵へては鋼鐵を嚙ぢり、罐詰を請負ふては石を詰込み、斯う云ふ立派な智慧を出してヌースー式をやるのだ。さうすれば別に斯んな山奥に隠れて慄うて居らないでも好いのだ。白晝に堂々と大都會のまん中を自働車を飛ばし、白首を乗せて天下の馬鹿者どもを睥睨しつゝ、葉巻を燻らして大きな面をしていけるのだぞ。モウ斯んな仕様もない小盗人は廃めて、世界一の寶を手に入れる商賣に乗り替へたら何うだい。軍艦嚙ぢりよりも、レール喰ひよりも、砂利喰ひよりも何万倍とも知れぬ結構な商賣があるのだ」

甲「ヤアそんな商賣が、親方何處にありますか」

玉「あらいでかい。俺にまア二三日ついて歩いて見よ。斯うして俺は乞食のやうな風に化けてをるが、其實は立派なものだぞ。今の世の中は家を飾り、衣服を飾り、身体中金ピカに扮して居る奴は、却て内實が苦しいものだ。家の中に火の雨が降つて居る。俺達は斯うして表面は汚い風をして居る代りに、かゝりものが澤山はからず、大變氣樂で、世界の者の知らぬ結構な寶を手に入れて、毎日日日嬉し〳〵の花を咲かして

樂しんで居るのだ。一つ貴樣も俺の乾兒になつたらどうだ。隨分小盜人も苦しいものだろう」

甲「御察しの通り隨分苦しいものです。併ししやうことなしに斯んな商賣をやつて居るのです」

乙「三國ケ嶽の鬼婆アさんは、何でも蜈蚣姫とか云ふたさうですな。蜈蚣の精から生れたのぢやありませぬか」

玉「なアに、そんなことがあるものか、隨分あの婆アさんは俺の親方で自慢するぢやないが偉いものだ。世界中の金錢を自由にして居るのだ。それだからお錢（足）が、たいへんと有るので蜈蚣姫と言ふのだ」

丙「アーそれで蜈蚣姫と云ふのですか。偖を云つても金錢の世の中ですから、せめて蜈蚣姫の乾兒になりとして欲しいものですな」

玉「俺が蜈蚣姫の代理を勤めて居る玉公と云ふものだ。此處に二人、怪体な面をして來て居る奴は、龍公、國公と云つて隨分貴樣のやうに奴甲斐性の無い、小さい小盜人をチヨコ〳〵やつて居つた奴だが、到頭往生しやがつて俺の乾兒になつたのだ。金錢よりも何よりも、モツト〳〵立派な寶が發見されたのだ。それを俺達は二人の乾兒を伴れて取りにゆくのだ。それは立派なものだそ。紫の玉に黃金の玉だ」

乙「へーい、それは立派なものでせうなア」

玉「その玉さへあれば三千世界の事は、何でも、かでも、自分の心の儘になるのだ。貴

樣も俺の乾兒にしてやるから、御供をしたらどうだ。さうして名は何と云ふか」

甲「ハイ私は遠州と申します、それから此奴が駿州、此奴が甲州、武州に三州と云ふものです。モー一人の奴は雲助上りだから雲州と云ふ名がつけてあるのです」

玉「さうか、よし夫れでは小盜人は今日限り廢めるか、何うだ」

遠州始め一同は

「ヘイ〳〵誰が斯んな小さい商賣を、アタ恐い、致しますものか。貴方の御供を致しまして、これから其の玉を取りに參りませう」

玉「オイ此處に居る龍州と國州は、貴樣等の兄貴分だから、よく言ふ事を聞かねばならぬぞ。それも承知か」

遠「私は承知致しました。一同の奴も異議はありますまい」

玉「さうか、それならよし。今日からこの玉州さんの新乾兒だ。オイ龍州、國州、俺は今餓に腹を痛めずに、これだけ大きな子を生んだのだから、貴樣達は子守役になつて世話をしてやつて呉れ」

龍「エー仕方が無い。國、何うするつもりだ」

國「どうすると云つたところで、行きつきぱつたりだ。まア行くとこ迄行つて玉を掠奪した上のことだ。オイ〳〵貴樣等は俺の弟分だ。俺達二人の言ふことを神妙に聞くのだな。どんな用があつても直接に、お頭領の玉州さんに口を利いちやならない。この國州や、龍州に相談をかけ、指揮を仰ぐのだぞ」

遠「ハイ委細承知致しました。併し乍ら私の大親分に天州と云ふ奴があります。此の天州は今三五教の本山へ、何か結構な玉があるに違ひないと云つて、信者に化け込んで這入つて居ります。それは徳公と云ふ智慧も力も立派に備はつた大親分です」

玉「ナニ、あの徳公が貴様の親分と云ふのか。彼奴は聖地で門掃をして居つた奴ぢや。あんな奴を親分に仰ぐ貴様だから知れたものだ。實の所は俺は泥棒でも何でもない、三五教の誠一つの教を宣傳する玉治別のプロパガンディストだ。さうしてこの御二方は龍國別、國依別と云ふ立派な宣傳使だ。サアこれから其方等が、すつぱりと改心をして誠の道に復歸るか、さうでなければ、其方達に言霊を發射して、ビリツとも出來ないやうに、五年でも十年でも固めて置くがそれでもよいか」

一同「エー貴方は、さうすると三國ケ嶽の鬼婆の乾兒ではないのですか」

玉「定つた事だよ。誰が泥棒商賣のやうな、世間の狭い引合はぬことをするものかい。俺達は人を相手にせず、天を相手にすると云ふ、實に武勇絶倫なる不世出の英雄豪傑だ」

甲「泥棒の親分でさへ結構だと思つてゐるのに、三五教の宣傳使とは思ひもよりませんだ。併し泥棒よりも幾千倍、イヤ天と地との差異ある神様の御道、どうぞ吾々を可愛がつて救ふて下さいませぬか」

玉「ヨシ〳〵救ふてやる。その代りに吾々の指揮命令に盲從を續けるのだよ」

此時空中に涼しき宣傳歌と思はるゝ曲が聞ゑて來た。

三千世界の梅の花
本靈を曇らせし
誠の神の御教に
この谷道に現はれし
甲州、三州其他の
神の誠の教を說き
力を協せて高春の
アルプス教の司神
どつと乘り込み如意寶珠
一度に開く時來り
憐れな世人を悉く
救ふ時とは成りにけり
遠州、武州を始めとし
曲津をこと〴〵言向けて
いよ〳〵吾等が睦び合ひ
山の尾の上に巢を造る
鷹依姫が本城に
黃金の玉や紫の
玉をマンマと手に入れて
立直さんは目の當り
雲州、三州諸共に
敵は幾萬あるとても
直日の劍扱きつれて
神の誠の言靈に
勝閧上げて神界の
千代萬代に名を揚げて
生かして通る神の道
三千世界を神の世に
遠州、駿州、甲州、武州
來れや來れいざ來れ
何の懼るゝことあらん
群がる奴原悉く
縱橫無盡に攻めなやめ
堅磐常磐の御使と
盡きぬ生命を何時迄も
朝日は照るとも曇るとも

月は盈つとも虧くるとも　鷹依姫の手に持てる
寶珠の玉を取り復にし　此世を救ひの神として
吾等と共に抜群の　功名手柄をしよぢやないか

○

ア、惟神　々々
さしもに嶮しき山坂を　御靈幸はひましませと
瑞の御靈の三柱に　先に立つてぞ進み行く
三五の月照る夜半頃　五つの身魂を加へつゝ
大槻並や能勢の里　別院村を乗り越にて
乗せて馳行く口車

○

堀津の國の多田の里　波を漲へし津田の湖
畔にこそは着きにける

○

此の物語長けれど　眠りの神に誘はれて
横に寢乍ら根の國や　華胥の國に進み行く
ア、惟神　々々　御靈幸はひましませよ
後振り返り眺むれば　外山の霞晴渡り
高春山の頂きに　豊二照らす朝日影
上るを待つて此の續き　いと細やかに傳ふべし

（大正一一、五、一六、舊四、二〇、外山豊二録）

瑞　月

惟神　みちの奥處に分け入れば　萬代散らぬ花ぞ咲きぬる

世の中は高き低きの別ちなく神の恵みに漏るゝことなし

六七九　言の疵

玉治別が早速の頓智に、六人の小盗人は始めて其非を悟り、喜んで神の道に歸順し、宣傳使に從つて高春山に向ふ事となつた。日は漸く暮れかゝり、月背と見ゐて山と山とに圍まれし谷道も、どことなく明かるくなつて來た。されど東西に高山を負ひたる谷路には、皎々たる月の影は見ゐなかつた。暫くすると怪しき唸り聲か前方に聞ゐ、次で幾百人とも知れぬ人の足音らしきもの、刻々に高く聞ゐて來た。

玉『ヨー怪しき物音が聞ゐて來たぞ。コリヤ大方山賊の大集團の御通過と見ゐる。我々は此處に待受して、片つ端から言向和し、天晴れ大親分となつてやらう。アア面白い

〳〵。天の時節が到來したか。サア龍、國、遠州、其他の子分共、抜目なく準備を致すのだよ」

國「ハハア。又商賣替ですかな」

玉「機に臨み變に應ずるは英雄豪傑の本能だ」

遠「モシ〳〵あの足音は人間ぢや有りませぬ。あれは千匹狼と云つて、時々此路を通過する猛獸です。何程英雄豪傑でも、千匹狼にかゝつては叶ひませぬ。サア〳〵皆さま、散り〴〵バラ〴〵になつて、山林に姿を隱して下さい。餘り密集して居ると狼の目に附いたら大變です」

玉「ナアニ、善言美詞の言靈を以て、狼の奴殘らず言向け和すのだ」

龍「そんな馬鹿言つてる所か、サア早く、各自に覺悟をせよ。畜生に相手になつて堪るものか。怪我でもしたら、それこそ犬に咬まれた樣なものだ……否狼に咬まれては損害賠償を訴へる譯にも行かず。治療代もごつからも出やせぬぞ。オイ國さん、遠州驗州一同、玉公の言ふ事を聞くに及ばぬ。今日は俺が臨時の大將だ。サア早く〳〵」

と傍の樹木密生せる森林の中へ駈込んだ。國依別外六人は龍國別と行動を共にした。

玉治別は依然として路上に立ち

玉「アハヽヽヽ、どいつも此奴も弱い奴だなア。多寡が知れた四つ足の千疋万匹何が怖いのだ。オイ狼の奴、幾らでも出て來い」

と呶鳴つて居る。狼は五六間前まで列を組んでやつて來たが、路の眞ん中に立ちはだ

かり、捻鉢巻をし乍ら喋やいで居る玉治別の勢に僻易したか、途を轉じて谷の向側の山を目がけ、ガサ〳〵と音させ乍ら、風の如くに過ぎ去つて了つた。玉治別は

玉「アハ、、、、弱い奴だな。そんな事で高春山の猛惡な鬼婆が、どうして退治が出來るか。エー能い足手纒ひだ。單騎進軍と出かけよう」

と四邊に聞ゆる樣にワザと大聲で喚き乍ら峠を登り行く。龍國別外七人は早くも山を一生懸命に驅あがり、向側に姿を隱して居た。其爲玉治別の聲も聞ねなくなつて居た。

玉治別は鼻唄を唄ひ乍ら、峠の頂上に達した。峠の頂上に赤兒岩と云ふ赤子の足型の一面に出來た。カナリ大きな岩石が湧き出て居る。

玉「アヽ結構な天然椅子が人待顔にチヨコナンとやつて居るワイ。オイ岩椅子先生。貴樣は餘程幸福な奴だ。三五教の大宣傳使兼山賊の大親分たる玉治別命又の御名は田吾作大明神が、少時尻をおろして休息してやらう。此光榮を堅磐常磐に、此岩の粉微塵になる千万劫の後迄も忘れてはならぬぞ。躓づく石も緣の端、腰掛け岩椅子もヤウパリ緣の端だ。……ヤア始めて月樣のお顏を拜んだ。實に立派な美しい御姿だなア」

と獨ごちつゝ少しく眠氣を催し、フラ〳〵と體を搖つて居る。其處へスタ〳〵と上つて來た二人の荒男

甲「ヤア來て居る〳〵」

乙「居睡つて居るぢやないか。大分に草臥よつたと見たるワイ。オイ源州、貴樣は是れを持つて、テーリスタンに渡すのだ。俺は今三五教宣傳使が澤山な子分を連れて、

高春山へやつて來よるから、其準備の爲に行くのだから、貴樣は茲に金も有れば、一切の作戰計畫が記した人名簿もある。……しつかりとして渡して呉れよ」

玉治別はワザとに聲をも出さず、首を二三度上下に振つて包みを受取つた。二人の荒男は追つ手にでも追ひかけられたやうな調子で、峠を南へ地響きさせ乍ら、巨岩が山上から落下する樣な勢で駈下る。

玉「彼奴はアルプス敎の……部下の者と見ゐるな。俺を味方と見違へて、大切な物を預けて行きよつた。ヤツパリ、アルプス敎の奴も巡禮姿になつて居るのがあると見ゐるワイ。併し乍ら此處に居つては、又やつて來よつて發覺されては面白くない。なんとか位置を轉じて、ユックリと中の書類を調べて見ようかな」

と小聲に言ひ乍ら、二三十間許り山の尾を踏んで、月の光を賞めつゝ、歩み出した。谷底に當つて幽かな火が、木の間に瞬いて居る。これを眺めた玉治別は

玉「アア此山奥に火を點して居るのは、此奴ア不思議だ。ヨツトしたら山賊の棲み家か、但は樵夫かつ。何は兎も有れ、あの火光を目當に近寄つて、樣子を窺ふて見よう。旅と云ふものは隨分面白いものだなア」

と一點の火を目標に、樹木茂れる峻しき山を、谷底目蒐けて下り着いた。見れば笹や木の木皮を以て屋根を蔽ひたる、小さき木挽小屋であつた。中には男の泣き聲が聞ゐて居る。

玉「モシ〳〵私は巡禮で御座いますが、道に踏み迷ひ、行手は分らず、幽かな火を目

あてに此處まで參りました。どうぞ、怪しい者では有りませぬから、一晩泊めて下さいな」

中より男の聲『ハイ〳〵、此處は御存じの通り、穢苦しい木挽小屋で御座いますが、巡禮樣なれば大變結構で御座います。どうぞ御這入り下さいませ』

と快く荒くたい戸を、中からガタつかせ乍ら漸く開いて、奥に案内する。玉治別は案内に連れて、一寸した山中に似合ぬ美しい座敷に通つた。

玉『此深山にお前さん、たつた一人暮して居るのかい。門にて聞けば男の泣き聲がして居つたが、アリヤ一体、誰が泣いたのだ』

男『私は木挽の杢助で御座いますが、家妻のお杉が二時ばかり前に國替を致しましてそれが爲に死人の枕許で、此世の名殘に女房に向つて泣いて遺りました。併し乍ら俄やもをでどうする事も出來ず、靈前に供へる物もないので、握飯を拵へて靈前に供へ、戒名の代りに板切れを削つて、斯うして祀つて置きましたが、あなたは巡禮樣ぢやと聞きましたが、どうぞ私がお供へ物の準備や、其外親友や寺の坊さんに知らして來る間、此家に留守して居て下さいますまいか。一寸往つて參りますから……』

玉『ヘエそれは誠にお氣の毒な事ですな。私も急ぐ旅ではあるが、これを見ては、見棄ておく譯にも行かぬ。死人の夜伽をして居るから、サア〳〵早くいて來なさい』

杢『是れで安心致しました。どうぞ宜しうお願致します』

と イソ〳〵戸外に駈出して了つた。玉治別は

玉「エー仕方がない。偶家が在ると思へば死人の夜伽を命ぜられ、あんまり氣分の良いものぢやない。それよりも千疋狼と戰爭する方が、なんぼ氣が勇んで、心持ちが良いか知れない。併し此れも時の廻り合せだ。泥棒から金を貰ひ、秘密書類を巧く手に入れたと思へば、一時經つか經たぬ間に忽ち坊主の代りだ。蚊の喰ふのに蚊帳も釣らずに、こんな所にショビンと殘されて、蚊の施行を、今晩はやらねばならぬか。ここぞ此處らに湯でも湧いて居りはせぬかな」

と其處ら中を探して見ると、口の缺けた土瓶が一つ手に觸つた。

玉「ヨー水も大分に汲んであるワイ。一層の事、土瓶に湯でも沸かして飲んでやらうかな」

と木の破片屑を拾つて、竈に土瓶を懸け、コト〳〵と焚き出した。瞬く内に湯は沸騰つた。

玉「サア此れでも飲んで、一つ夜を徹かさうかな」

フト女房の死骸の方に目を注けると、頭の先に無字の位牌を据ゑ、線香を立て、其前に握飯が供へてある。蒲團の中から細い手を出して握飯をグツと摑んでは取り、又摑んでは取る。

玉「エー幽靈の奴、供へてある握飯を喰つて居やがる。此奴ア、胃病かなんぞで死んだ奴だらう。喰物に執着心の深い亡者だなア。何だか首の邊りがゾク〳〵と寒うなつて來居つた。エー構はぬ、熱い湯でも呑んで元氣でも出そうかい」

と口の焼ける様な湯を、欠けた茶碗に注いで、フウ〳〵と吹きもつて飲み始めた。

玉『ヤア何だ。ここの水は炭酸でも含んで居るのか、怪体な臭氣がするぞ。大方女房が藥入れか、炭酸遭達でも入れて居つた土瓶かも知れないぞ。あんまり慎て中を調査るのを忘れて居つた。ヤア何だか粘つくぞ。大變に粘着性のある水だなア』

と明かりに透かして見ると、燻つた中からホンノリと文字が浮いて居る。能く〳〵見れば「お杉の痰壺代用」として有る。

玉『エー怪つ体の惡い、此奴ア失策つた。幽靈は細い手を出して握飯を食ふ、此方は痰を呑まされる、怪つ体な事もあればあるものだ。……コリヤ最前の男が俺に與れた此包みも、ヒョットしたら蜈蚣か何かが出て來るのぢや有るまいかな。一度ある事は三度あると云ふから、ウッカリ此奴は手が附らけれぬぞ。開けたが最後、爆烈弾でも這入つて居つたら大變だ。ヤア厭らしい、又細い手で握飯を摑んで居やがる。大方喰ふて了ひよつた。此奴ア、中有なしに直に餓鬼道へ落ちた精靈と見ゐるワイ。こんな所に厭らしうて居れるものぢやない。併し一日男が留守してやらうと請合つた以上は、卑怯にも逃げ出す譯にも行くまい。やがて歸つて來るだらう。それまで其處らの林をぶらついて、お月樣のお顏でも拜んで來よう。斯うなると我々に同情を表して呉れるのは、お月樣丈ぢや。龍國別、國依別、其他の腰抜は、どつかへ滅盡して了ひ、寂しい事になつて來たワイ』

と門口を跨げ、何時とはなしに二三丁も歩み出し、谷水の流れに水を掬ひ、口に含んで

盛に、家鶏が水を飲む様に、一口入れては首を擧げ、ガラ〳〵〳〵ブー〳〵と吹き、又一口飲んでは仰向き、ガラ〳〵〳〵、ブー〳〵〳〵と、幾度ともなく繰返して居る。

火影を合圖に探つて來た、龍國別、國依別、遠州、武州外四人は、玉治別の姿を夜目に見て、怪しき者と木蔭に佇み様子を窺つて居る。

遠「モシ宣傳使様、ガラ〳〵ブー〳〵が現はれました。ここは一つ家の木挽小屋、何が出るやら知れませぬ。アリヤきつと化州でせう」

國「ナニ幽靈が水を飲んでゐるのだ。つまり含嗽をしてるのだよ。貴様行つて査べて來い」

玉治別は木蔭にヒソ〳〵語る人聲を聞きつけ

玉「オイ何處の何者か知らぬが、俺も連れがなくて淋しくつて困つて居るのだ。狼でも、泥棒でも、何でも構はぬ。遠慮は要らぬ。這入つて、マア湯が沸かしてあるからゆつくりと飲んだがよかろう」

龍「アアあの聲は玉治別によく似て居るぢやないか」

國「左様々々、大方玉公の先生でせう……オイ玉さんぢやないか」

玉「その聲は國だなア。好い所へ來て呉れた。マア面白い見せ物も見ようと儘だし、湯も澤山に沸いてあるかち、トツトと俺に從いて出て來い。今日は山中の一つ家の臨時御主人公だ。サア此方へ……」

と手招きし乍ら、月光漏るる谷路を歸つて行く。

遠「ヤア此家は李助と云ふ強力者の住まつて居る木挽小屋です。彼奴に隨分、我々の仲間は酷い目に會うたものです。劍術、柔術の達人で、三十人や五十人は手毬の樣に投げ付ける奴ですよ。そうして立派な嬶アを持つて居るのです。其嬶アが又中々の强者で、李助に相當した腕力を持つて居るのだから、誰れも此家ばつかりは、怖くてよう窺はなかつた所です。私等は顏をこれまでに見られて居るから險呑です。貴方がたどうぞお這入り下さいませ。暫時木蔭で待つて居ますから」

龍「何、我々が附いて居れば大丈夫だ。遠慮は要らぬ。今日は玉公親分の家長權を持つて居る日だから、トットと這入つたがよからう」

遠「それでもあんまり闊が高くつて跨れませぬワ」

龍「ハハア、ヤツパリお前にも羞恥の心が、どつかに殘つて居るな。そんなら暫く泥棒組は木蔭に待つて居て呉れ」

遠「泥棒組とは酷いぢや有りませぬか。最早我々はビユリタン組とは違ひますかいな」

龍「ビユリタン組でも、泥棒組でも良いワ。暫く其處らへドロンと消えて待つてゐるのだよ」

と云ひ乘て、龍、國の兩人はヌツと家中に這入り

兩人「ヤア割りとは山中に似ず、小瀟洒とした家だなア」

玉「エ、定つた事だい。俺が家長權を握つた大家庭だから、隅から隅まで能く行屆いて

居らうがな。併し俺の嬶が俄の罹病で死亡しよつたのだ。就ては俺に戀着心が殘つたと見ゐて、死んでからでも細い手を出して、十許りの握飯を、既に六つ許り平げて了ひよつたのだ。マア湯でも呑んでユックリと嬶アの夜伽をしてやつて呉れ」

國「又しても、せうもない。本當に當家に死人があつたのか。貴樣泥棒の臨時親方になつたと思うて、强盜をやつて此家の大切な嬶アを殺したのぢやないか」

玉「若い時から、女殺しの後家倒し、妒殺しと仇名を取つた玉治別さんぢや。口でも殺せば、目でも殺すと云ふ業平朝臣だから、女の一人位、强盜になつて殺すのは當然だよ」

龍「マサカ人の女房を殺す樣な、貴樣も惡人ではなかつたが、三國ケ嶽の鬼婆の靈でも憑きよつたのかなア。エライ事をして呉れたものだワイ」

玉「マアどうでも良い。湯が沸いて居るから一杯飲んだらどうだ。これも玉公さんがお手づから、お沸かし遊ばした結構なお湯だ。チョッと毒味をして見たが、隨分セキタン臭い水だ。併し胃病の藥には好いかも知れないわ」

國「一寸其土瓶を俺に貸して呉れ。調査る必要があるから、ウッカリ知らぬ宅へ來て、湯でも飲まうものなら、どんな毒藥が仕込んであるか分つたものぢやないワ」

玉「ナアニ、抜目のない玉公さんがチヤンと査べてある。決して毒ぢやない。此れは寶丹の入れ物だ。それで寶丹の匂ひが少しはして居る」

ヒニヤリと笑ふ。國依別……

國「ナニ放痰、いやマス〳〵怪しいぞ」

と無理に取り上げ、灯にすかし見て

國「ヤア何だか、印が附いて居る……お杉の痰壺代用……エイ胸の惡い」

と云ひなり、不潔そうに土瓶を握つた手を放した。土瓶は庭にバタリと落ちて滅茶々々に破れ、沸湯はパッと四方に飛び散り、三人の顏に熱い、臭い奴が、厭と云ふ程御見舞申した。

龍「サッパリ男の顏に墨ではなうて、痰を塗りやがつた。ヤア〳〵死人がムク〳〵と動き出したぢやないか。永久の死人ぢやあるまい。夜分になつたら臨時死ぬると云ふ睡眠狀態だらう」

玉「そんな死に方なら、誰でも毎晩やつて居るぢやないか。お前達の樣な怠惰者は、日が永いとか云つて、木の蔭で一時も二時も、チョコ〳〵死ぬぢやないか。そんな死に樣とはチット違うのだい。徹底的の永き眠に就て十万億土へ精靈の旅立の最中だ」

龍「それにしては、細い手を出して飯を摑んで食つたり、ムク〳〵動いて居るぢやないか」

玉「オイ國さん、お前さんは宗彦と云つて、隨分に嬶アを澤山に泣かしたり、殺したと云ふ事だが、大方其亡念が此家の死人に憑いて居るのかも知れないぞ」

國「何にしても氣分の惡い家だ。そうして此家の主人は何處へ行つたのだい」

玉「一寸買物に行つて來るから、歸るまで留守を賴むと云つて出たなり、まだ歸つて來

ないのだ。隨分暇の要る事だなア」

死人を寢かした夜具はムク〳〵と動き出した。五つ六つの女の兒がムクッと起きあがり……

「お父さん〳〵〳〵」

と四邊をキョロ〳〵見廻して居る。三人はヤッと胸撫でおろし

「ヤアこれで細い手も、握飯掴みも解決がついた」

斯かる所へスタ〳〵と歸つて來たのは主人の杢助

杢「巡禮さま、エライ御厄介になりました。何分急いで行つたのですけれど、夜分の事とて、先が容易に起きてくれませぬので、つい手間取りまして、エライ御迷惑を掛けました」

玉「エー滅相な、どう致しまして……ここに二人居りますのは、我々の兄弟分で御座います。どうぞ御見知り置かれますように」

子供は

「お父さん」

と走つて抱きつく。

杢「アーお前は賢い子だ。能う留守をして居つた。あんな死んだお母アの側に默つて寢て居るとは、肝の太い奴だ。世の中には大きな男が、宣傳使に歩いて居つても、死人の側には怖がつて、三人も五人も居らねば、夜伽を能うせぬものだが、子供はヤッパ

り罪が無いワイ」

玉治別は頭を掻き

玉「ヤア恐れ入りました。私もチッとも怖くは有りませぬ」

李「女房の靈前にお經を唱へて下さいましたか」

玉「ハイお茶湯を獻げませうと思つて、つい考へて居りました。併し遠距離讀經をやつて置きました。それも無形無聲の、暗祈默禱、愈是れから始める所で御座います」

と何が何やら間誤ついて支離滅裂の挨拶をやつて居る。ここに三人は靈前に向ひ神言を奏上し、お杉の冥福を祈り、遠州外五人の手傳ひの下に野邊の送りを無事に濟ました。

玉「ヤアこれで無事終了、先づ〳〵お芽出……ふくもありませぬ。惟神靈幸はへ坐せ〳〵」

李「有難う御座りました」

一同は

「左樣ならば…隨分御壯健でお暮しなさいませ」

と出立つて行かんとする。李助は

李「モシ〳〵此處にこんな風呂敷包みが殘つて居ます。コレはお前さんのぢや有るまいかな」

玉「ヤア到頭忘れて居た。これは私ので御座います」

李「お前さんのに間違ひはないか」

玉「實の所は峠の岩に休息して居つた時に、子分がやつて來て、お頭樣此通りと言つて渡して行きやがつたのだ。金も隨分澤山あるだらう」

李「其方は巡禮と見せかけ、大泥棒を働く奴だな。コリヤ此風呂敷は現在李助の所持品だ。これを見よ。李の印が附いて居る。此間の晩に、五六人扳き刀で躍り込んで、俺の留守を幸に、包みを持つて歸つた小盜人が有る。女房は何時もならば木葉盜人の三十や五十、束になつて來た所が感應ぬのだが、何分勞瘵で骨と皮とになつて居た所だから、ミス〳〵盜られて了つたのだ。そうすると貴樣はヤツパリ泥棒の親分だな。サア斯く現はれし上は百年目、此李助が片つ端から素首を引扳いてやらう。……何れも皆覺悟せい」

と鉞を揮つて勢鋭く進んで來る。

玉「待つた〳〵。嘘だ〳〵。夜前泥棒が俺に渡したのだよ。俺や決して泥棒でも何でもない。マア待て〳〵……」

李「泥棒が泥棒でない者に金を渡すと云ふ事があるかい。貴樣もヤツパリ泥棒の張本人だ。サア量見致さぬ」

と今や頭上より玉治別を梨割にせんとする此刹那『一二三四……』の天の數歌を一生懸命に稱へ始めた。玉治別の手を組んだ食指の尖端より五色の靈光放射し、李助は身体強直して其場に忽ち銅像の樣になつて了つた。

玉「ハ、、、、」

龍「オイ玉公、我々に離れて何處へ行つたかと思へば、泥棒をやつて居たのだな。モウ今日限り貴樣と縁を切るから、そう思へ」

國「オイお前は何とした卑しい根性になつたのだ。俺はモウ合はす顔が無いわい」と涙聲になる。玉治別は一伍一什を詳細に物語り、漸く二人の疑は氷解した。李助も固まつた儘、此實地を目擊して、玉治別の無實を悟つた。玉治別は「ウン」と一聲指頭を以て靈縛を解いた。李助は元の身体に復し

李「お客さま、失禮な事を申上げました。どうぞ御勘辨下さいませ」

玉「分つたらそれで結構です……何も言ふ事は有りませぬ。併し此包みはあなた調べて下さい」

李「そんなら皆さまの前で檢べて見ませう」

とガンジガラミに括つた風呂敷包を解き開いて見れば、金色燦然たる金銀の小玉ザラ〳〵と現はれて來た。そうして一冊の手帳が出て來た。開いて見れば、アルプス敎の秘密書類であつた。三人はこれ幸ひと懷中に收め、後は李助に返し、九人連れ此家を發つて、津田の湖へ向つて宣傳歌を謠ひ乍ら勢よく進み行く。

（大正一一、五、一七、舊四、二一、松村眞澄錄）

瑞　月

夜もすがら和知の流れに御禊して世を清め行く瑞能大神
百千々の　心の曇り晴れぬらむ　雲井の空の月を見し夜は
思ひきや　賤が伏家に生れ來て　神の大道に仕へむとは

第一二三章　是生滅法

六八〇　小杉の森

高春山の岩窟に
鷹依姫を言向けて
靡かせなむと三五の
鼻も高姫、黒姫が
意氣昇天の勢で
天空高く飛んで行く
何の便りも無き儘に

巣を構へたる曲神の
誠の神の御教に
道の教の宣傳使
天の岩樟船に乗り
高天原を後にして
三月經ちたる冬の空
言依別の神司

龍國別や國依別
密かに旨を含ませつ
茲に三人の宣傳使
輕き姿の扮裝に
梅照彥か神館
稜威の岩窟に參拜し
來勿止神に送られて
越ねて漸う法貴谷
登りて見れば此は如何に

玉治別の三柱に
高砂山に向はしむ
草鞋脚絆に蓑笠や
萬代壽く龜山の
一夜を明かし高熊の
神の御言を拜聽し
善惡正邪の大峠
戸隱岩の傍らに
行手に當りて四五人の

怪しき影は山賊の
俄に變る三國岳
早速の頓智に山賊は
元來ねぢけた曲靈
木挽小屋なる杢助が
包みの光に目が眩み
心の鬼に遮られ
心秘かに六人は
龍國別に從ひて

群と玉治別の司、
蜈蚣の姫の片腕と
一時は兜を脱ぎけれど
湯谷が峠の谷庭の
家に立寄り金銀の
又もや元の山津神
惡魔の道に逆轉し
目と目を互に見合せつ
津田の湖水の畔まで

素知らぬ顔を裝ひつ　三人の司と諸共に
やう〳〵湖邊に着きにける

三州「モシ玉治別さん、あなたは三五教の宣傳使と云つて居るが、實際は蜈蚣姫の乾兒の玉公に間違ひは有るめい」

玉「馬鹿を言つては困るよ。汝はどうして、俺がそんな惡神に見ゑるのだ」

三「論より證據、泥捧の乾兒を使つて、杢助の宅へ忍び入らせ、澤山の金銀を强奪し、お前は赤兒岩に待伏せして、乾兒から受取つたのだらう。直接に盜らないと言つてもやはり人を使つて盜ませたのだから、要するに今回の强盜事件の張本人だ」

玉「汝は今になつて、まだそんな事を言ふのか。俺の無實は既に杢助始め、大勢の者が氷解してゐるぢやないか」

三「それでも戸隱岩の麓で、蜈蚣姫の片腕だと自白したぢやないか。ナア甲州、雲州汝が證據人だ」

甲「そらさうだ。蛙は口から、吾れと吾手に白狀すると云ふ事がある。……オイ玉州、モウ駄目だぞ。何と言つても自分の口から言つたのだから、龍州に國州、俺の觀察は誤謬はあるまい。斯う大地を打おろす此杖は外れても、俺の言葉は外れよまいがな」

玉「ア、是れは聊か迷惑の至りだ。あの時は汝等を改心させる爲に、三十三相の觀自在天の眞似をして方便を使つたのだ。これから高春山の曲神の征伐に向うと云ふ眞最中、內訌を起しては味方の不利益だから、そんな事は後に詳しく。合點の行く樣に說

明してやらう。今日は先づ沈默を守るがよい」

三「假にも欺く勿れと云ふ宣傳使が、方便を使つたり、嘘を言つて良いものか。嘘から出た誠でなくて、誠から出た嘘を云ふお前は大泥棒だ」

遠「コラ三州の野郎、尊き宣傳使に向つて、何と云ふ雜言無禮を吐くのだ。愚圖々々吐すと、此遠州が承知致さぬぞ」

三「今迄は遠州の哥兄と尊敬して來たが、汝の樣な泥棒心の俄に消滅する樣な、腰抜は今日限り俺の方から縁を切つてやらう。泥棒ならば徹底的に、なぜ泥棒で通さぬのだ又改心するならば、本當の宣傳使に從つて誠の道へ這入るのなれば、俺だとてチットも不服は稱へないが、此玉に龍、國と云ふ代物は、どこまでもヅウ〳〵しく宣傳使だなぞと、假面を被つて居やがるからムカつくのだよ」

遠「オイ駿州・武州、汝はどう思ふ。俺はどうしても立派な宣傳使と觀測して居るのだ」

駿「俺もそうだ」

武「きまつた事だ。グズ〳〵吐すと、三甲雲の木葉盜人、雁首を引抜いてやらうか」

三「ナニ、猪口才な」

と三州は俄作りの有合せの杖を以て、武州の向ふ脛を撲りつけた。武州は「アイタタ」と其場に顏を顰めて倒れた。續いて甲州、雲州の二人、遠州、駿州を目蒐け、向脛を厭と云ふ程擲りつけた。脆くも三人は其場に蹲んで顏を顰め、笑つたり、泣いたり、怒

つたりして居る。

遠『蟻も這はすなと云ふ大切な向脛を叩きやがつて、……覺ゑて居れ』

三『本助爺だないが、肝腎のおアシをとられて苦しからう。おアシの澤山な蜈蚣姫さまの乾兒ぎもに修繕して貰へ。俺は最早汝等三人とは緣切れだ。勿論玉、龍、國の奴盗人とも同樣だ。こんな所に居るのは胸が惡い。これから先は善になるか惡になるか、吾々三人の都合にする。汝等は鷹依姫に散々脂を搾られ、高姫、黑姫の樣に岩窟の中へ閉ぢ込められて、木乃伊になるのが性に合うて居るワ……アバヨ』

と齒を剝き出し、腮をしやくり、尻を叩いて、うらゆる嘲笑を加へ、此場を棄て、湯谷ケ岳の方面指して駈て行く。

三州、甲州、雲州の三人は津田の湖邊を後に、湯谷ケ岳の山麓に着いた。此處には少彦名神を祀りたる、形ばかりの小さき祠が有る。樫の大木は半ば枯れ乍ら、皮ばかりになつて、若き枝より稠密な葉を出し、空を封じて居る。猿の聲はキヤッ〳〵と祠の背後の木の茂みに聞ゑて來た。

三『オイ、こゝまで漸く來るは來たが、玉治別以下の宣傳使はどうだらう。吾々を此儘にして放任して置くだらうかな。彼奴は馬鹿正直者だから、「折角神の綱の懸つた三人、再び邪道へ逆轉させては、大神樣に申譯がない」とかなんとか云つて、俺達の後を追つかけて來はせまいかと、そればつかりが氣にかゝるのだ』

甲『向うにも現に三人の足を折られた連中が居るのだから、去る者は追はず、來る者は

拒まずとか、何とか御都合の好い理窟を附けて、此アタ辛い山坂を、行徧も知れぬ我々の後を追つかけて來そうな筈がない。マア安心したが宜からうぞ」

雲「そんな心配は要らないよ。三人殘して有るのだから、三人が三人の足にでも喰ひ付いて、何とか此方へ來ない樣に工夫をするだらう。そんな取越苦勞は止めたが良からう。彼奴等三人は足が痛いと云つて、ヤツと津田の湖を、玉治別と一所に船に乘つて高春山の山麓に渡る手段をとり、湖水のまん中程で、俄に足痛が癒り、彼奴の懐の秘密書類を取り返し、ウマク目的を達するに定まつて居る。それよりも俺達は軍用金の調達が肝腎だから、自分の……これから作戰計畫を進める事にせうぢやないか」

三「何を言つても、百人力と云ふ豪傑の李助だから、到底正面攻撃では目的を達する事は出來ない。幸ひに女房の葬式の手傳や、穴堀さでしてやつたのだから、向うは氣を許して、俺達を歡迎するにきまつて居る。そうしてまだ女房の一七日は經たないのだから、彼奴も菩提心を出して、手荒い事はせないに定つて居る」

甲「併し高春山へ行くと云つて出たのだから、今更何と云つて、李助をチヨロまかさうか、ウツカリ拙劣な事を云ふと、計略の裏をかゝれて、取返しのならぬ大失敗に陷るかも知れない。爰は餘程智慧囊を壓搾して、違算なき樣に仕組んで往かねばなるまい。一つ此處で練習をやつて行かうではないか」

三「オ、それが宜からう」

甲「三州、お前は李助になるのだ。そうして俺と雲州がウマク化け込んで這入るのだ。

其時の問答を、今から研究して置かねばならぬからのう」

三「杢助の腹の中が分らぬぢやないか。それから觀測せぬ事には此練習も駄目だぞ。……

……雲州、汝が一層の事、杢助になつたらどうだ。體も大きいなり、どこともなしにスタイルが似て居るからなァ」

雲「俺も俄に百人力の勇士になつたのかな。ヨシ〳〵芝居をするにも、憎まれ役は引合はぬ。汝は小盜人役、此雲州が杢助だ。サア何なとウマく瞞して來い……雲州否杢助は智勇兼備の豪傑だから、借つて來た智慧や、一夜作りの考へではチヨロまかす事は到底駄目だぞ。此祠を杢助の館と假定して、貴樣等兩人が金銀の小玉を、ウマく手に入れるべく言葉を盡して來るのだよ」

三「定つた事だ。シツカリして肝腎の實を、……杢助……どうして俺が盜るか、妙案奇策を出して來るから、今後の參考資料にするがよからう。泥棒學の及第點を貰うか、貰へぬか、こゝが成功不成功の分界線だ。サア甲州、二三丁出直して、改めて杢助館へ乘り込むとせうかい」

と云ひながら二人は此場より姿を消した。

雲「暫く此祠を拜借して、杢助館と假定し、泥棒の襲來に備へねばなるまい。併し盜人は何時來るか分らないから、常に戸締りを嚴重にして置くのだが、今度の盜人は豫告して來るのだから、充分の用意が出來そうなものだが、さて差當つて防禦の方法が無い。本當の杢助なれば小盜人の五十や百は手玉に取つて振るのだが、此杢助はそう云

ふ譯にも行かず、何とか工夫をせねばなるまい……オウそうだ。今持つて歸ると云ふ所へ、コラツと大喝一聲、腰を扳いてやるに限る。玉治別の宣傳使が何事も言靈で解決がつくと云ひよつた。一つ力一杯呶鳴つてやらう。併し此處に金銀の代りに砂利でも拾つて、褌に包んで、分らぬ樣に置いとくのだなァ」

三「眞黑の褌の包を祠の下にソッと隱した。

三「オイ甲州、本當の杢助だないから、盗るのは容易だが、併しそれでは本當の練習にならぬ。何とか本眞物と見做して行かねば、本場になつてから當が外れ、首つ玉でも扳かれたら大變だから……」

甲「到底强盗は駄目だ。マア住込み泥棒の方法が安全第一だらう。彼奴は嬶アに死なれて困つて居る所、我々が親切に隱亡の役まで勤めてやつたのだから、巧妙く行つたら杢助も氣を許して、俺達を泊めて呉れるに違ひはない……サア其覺悟で行くのだよ」

「ヨシ〳〵」と三州は勢込んで行かうとする。甲州は袖をグッと握り

甲「オイ〳〵そんな戰に往く樣な調子で行つては駄目だ。涙でもドッサリと目に湛めて如何にも同情に堪へないと云ふ態度を示して往かねば先方が氣を許さぬぢやないか」

三「まだ一二丁も有るから、こゝで目に睡を附けても、到着までには風がスッカリ拭き取つて了ひよる。先方へ行つてから、ソッと睡を附けるのだ。忘れちや可かぬよ」

甲「忘れるものかい」

ヒコツ〳〵と足音を忍ばせ乍ら

甲「モシ〳〵杢助様、私は此間御宅で御世話になつたり、あんまり人の喜ばぬ隱亡までさして戴きました三州、甲州……モ一人は半鐘泥棒の雲州で御座います。併し雲州は其名の如く、どつかへウンでもやりに行つたと見にて遲れましたが、やがて後から來るでせう。あんな奴はどうでも良いのだ。折角盜つた寶を分配するのにも、配當が少なくなるから、同じ事なら二人が成功すれば、それの方が餘程結構だ」

三「コラ〳〵そんな腹の中を先へ言つて了うと、スツカリ落第だ。不成功疑なし。こゝは杢助館ぢやないか」

甲「杢助なれば又其考へも出るのだが、現在雲州が此處に居ると思へば、本氣になつて泥棒の練習も出來ぬぢやないか」

三「幸ひ、雲州の杢助がどつかへ行つて居ると見にて、不在だから良いものゝ、そんな事が聞にたら、サツパリ駄目だぞ」

甲「そうだと言つて、我良心の詐らざる告白だ」

三「良心が聞いて呆れるワ。貴様の兩親もエライ放蕩の子を持つたものぢや……と云つて泣きの涙で暮して居るだらう」

甲「ヤア其涙で思ひ出した。早く唾を附けぬかい」

三「そんな大きな聲で言ふと、發覺て了ふぞ。此方は何程目に唾を附けても、先方が音に聞にたツバ者だから、グツ〳〵してると、一も取らず、二も取らずアフンとせねばなるまいぞ。……モシ〳〵杢助さん、其後、よう御尋ねを致しませなんだが、御機嫌

は宜しいかな。お孃さんも御變りは有りませぬか」

雲「此眞夜中にお前達は何しに來たのだ。折角改心し乍ら、俺の持つて居る金銀に眼が眩んで、魔道へ逆轉して來たのだらう。モウ良い加減に改心をしたらどうだ。惡をする程世の中に馬鹿な奴は有りませぬぞや。假令人間は知らずとも、天知る地知る、自分の精靈たる本守護神も、副守護神も皆知つて居る。天網恢々疎にして漏らさず。良い加減に小盗人を廢めて、結構な無形の寶を手に入れる事を、何故心がけぬか。俺は女房がなくなつて非常に無情を感じて居るのだ。

白銀も黄金も玉も何かせん女房にます寶世にあらめやも

併し乍ら肉体の有る限り、衣食住の必要が有る。汝に慈善的に盗らしてやりたいのは山々であるが、そうウマくは問屋が卸さぬ。それよりも善心に立歸つたらどうだ」

三「オイ雲州、せうも無い事を言ひやがらと、張合が抜けて泥棒が出來ないぢやないか。アーアもう廢業したくなつた。併し乍ら遠州、駿州、武州に對しても、足までたゝき懲して仕組んだ主言だから、不成功に終れば彼奴等に合はす顔がない。モウちつと變つた事を言つてくれ」

雲「ヨシ、御註文通り變つた事を言つてやらう……其方はアルプス敎の鬼婆の乾兒でらうがな。改心したと見せかけ、目に唾を附け、俺の心に油斷をさせ、金銀の小玉をウマくシテやらうと思つて來たのだらう。そんな事は俺の天眼通でチヤンと前に承知して居るのだ。此闘一足でも跨げるなら跨げて見よ。百人力の杢助さんだ。手足を

引き千切つて、亡き女房の御供にしてやらうか。狐鼠盗人奴』

三『オイ〳〵雲州、そつ出られては俺の施すべき手段がないぢやないか。女郎屋の二階で孔子の教を説く様な事を言ひやがるものだから、拍子が抜けた。強く出いと云へばそんな縁起の悪い事を言ひやがつてどうする積りだ。チツとは俺の立場にもなつて見よ』

雲『サア勝手に持つて歸れ。貴様の執着心の懸つた此金銀、長い浮世を短う太う暮さうと、汝は思つて居るが、幽界へ行つて鬼に金の蔓で首を絞められ、逆様に吊られるのを覺悟して持つて歸れ』

甲『コリヤ雲州の奴、せうも無い事を云ふない。そんな事を聞くと泥棒も出來ぬぢやないか』

雲『そうだと云つて眞理は依然眞理だ。取たい物は幾らでも取らしてやらう。其代りに俺も取つてやらう。汝の一つより無い生命を……金が大事か生命が大事か、事の大小輕重を能く考へて見い』

甲『そんな事を考へて居つて、泥棒商賣が出來るちのかい』

雲『泥棒商賣が辛けりや働け。働くのが厭なら睾丸なつと喰はへて死ぬるか、首でも吊つた方が良いワイ』

三『ヤア此奴ア駄目だ。モウ練習も打切りにせうかい』

雲『そうすると、汝は最早斷念したのか。腰抜野郎だなア。それだから何時までも天州